

---

# 泥舟

ヒダヌキ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

泥舟

### 【Nコード】

N2295M

### 【作者名】

ヒダヌキ

### 【あらすじ】

「うたわれるもの」二次SSです。

とある性悪少女（原作知識あり）がドSなインカラ皇の側室になつてしまい悪戦苦闘するラブコメっぽい何かです。

エルルウもハクオ口さんも当分登場しません。

中二指数120%でお送りします。誰得！？

## 01 荷台から見た景色

飛び出した俺の目の前で、国で一番の武人が武器を構えている。

国で一番の忠臣でもあったこの男が、主君に刃を向けるその胸中は理解できなくもない。

そして、俺はこの後何が起きるのかを良く“覚えていた”。

ゲーム序盤の中ボスである独裁者の哀れな末路が、少しの物悲しさと予定調和のような爽快感をもたらした事も。

ベナウイが、暗愚の皇インカラを手に掛けるシーン。

何故かそこに混じった異分子<sup>じぶん</sup>は、愚王を守るために立ちはだかった非力な女の役だった。

ほぼ詰んだこの状況を打破すべく、必死に思考を巡らせる。

あと少し、あと少しだけ時間を稼げ。

俺の策はまだ尽きていない。

部屋の入り口に近づいてきていた足音が、驚いたように立ち止まった時、

淀んだ空気がふたたび対流し始めた。

俺の経歴には、僅かな過去しか存在しない。

最古の記憶は、ヴェールに覆われたような、鈍い視界が捉えた空だった。

その日、右も左もわからない瘦せこけた女が、  
たまたま街道を通りかかっただけの荷車に拉致され、皇への献上品とされた。

## phase 7

気が付いたときには、なにやら狭いところに仰向けに挟まっていた。そこが、荷物と思しき山の間であると理解するのに時間はかからない。

背中の下から、がらがらと音が聞こえる。

やけにレスポンスの悪い体を、ゆっくりと持ち上げると、ゆっくりと後ろから前に流れる木々が視界に入る。

3人の粗末な服を着た男たちと目が合う。

疑問は浮かばない。

妙な浮遊感がある割に、四肢の拳動は鈍い。

意識レベルはかなり低下しているのに、それを全く自覚できないかのような症状。

前に走っているのに、後ろに下がっていて。

何かから必死に逃げていて、一度も後ろを見たことはないし何が追ってきているのかも知らないのに、

それがこわいものであることは最初から知っているかのような白昼ムーンウォーク。

俺の産声は、些細な質問である。

「どこへ行くの？」

目の前の男共は、聞こえていないのか何の反応も示さない。  
何も知らないくせに、この状況には疑問は浮かばない。

疑問がないくせに口からは質問が飛び出る

「雨降りそうだよ、大丈夫？」

雨が降りそうだななんて知らなかった。  
しばし反応を待つ。

答えは得られない。

だが、男のひとりが空を見上げて、また視線を落とすのが見えたため、こちらの言葉が通じているらしいことは理解する。

こいつを仮に マツ と呼ぶことにする。

ちなみに、残りの二人は チヨ と メン である。

「わだち」

最早質問ですらない。

ちなみに、舌足らずな「わたち」が訛った語句などではなく、車輪が未舗装の地面につける二本の轍のことらしい。

前からヘンな音が聞こえた。

「牛のくしゃみ」

聞いたこともなくせに断定している。

メルヒエンである。

先ほどから俺が発している脈絡の無い言葉も、現実感の希薄さも全て。

メルヒエンには飴が良く似合う。

「ねえ、どこへ行くの？」

案の定答えは得られなかったが、マツがメンにぼそぼそと話し掛ける切っ掛けを与えたようだ。

「なあアニキ、何か言ってるぜ。どうするよ」

「心配するな。こっちが黙っていれば、言葉が通じないと思って諦めるだろ」

「流石アニキ。冴えてるぜ」

ありえない論理で場が丸く収まる。

ゆっくりと、道がカーブする。

今まで一点透視な構図だった視界が、わだちと木立が織りなす二点透視の世界へと姿を変える。

荷車の一番近くにいた男が、とんとんと堰板を叩いてリズムを形作る。

とんとんととんとん

やがて、それにも飽きたのか、ガリツと爪が木を引っかく音が聞こ

え・・・

舌打ちと小さな罵り声に取ってかわる。

「トゲが爪に刺さったの？」

チヨが軽くうなづく。

ちなみに、こいつもむさ苦しい貧相なおっサンである。

phase 8

「見せて見せて」

指を見せてもらう。

節くれ立って少しいびつな、疲れた手のひらをこねくり回す。

今まで気にもとめなかったが、自分の手よりも随分大きい。

いや、自分のたなごころが小さいのだ。

問題の個所は、小さな木片が刺さっていて、血がにじんでいた。

それが半透明な爪越しに良く見えた。

あたかも、蟻の巣観察キットである。

「くさび」

なんとなく連想したらしい音声を発しつつ、その指を全力でねじってみる。

非力なおナゴの手では目的を達せられなかったが、チヨが手を慌てて引っ込めて、小声で罵る。

「どうした。そいつに噛み付かれてもしたのか？」

「いえいえ、巨大なムカデがいただけですよ」

どうみても出任せの嘘であるわけだが、チヨ氏の面目を保つために俺は沈黙を選ぶ。

全身を覆う倦怠感も手伝って、意識を取り戻したときように、再び寝転がる。

ゆっくりと、たつぷりと時間をかけて思考を集中させて、ようやく脳がのろのろと働き出す。

この3人の男は誰だろう。

この荷車は、どこに向かっているのか。

俺はなぜここにいて、荷物に挟まっていたのだろうか。そもそも、俺の言動が変な理由はなぜか。

検索……。結果は全てネガティブ

うん。

自身の記憶に異常が起きていることはわかった。

自分の名前はなんだっけ。正解はすぐ見つかる。……。問題なし  
住所、年齢、電話番号……。問題なし

住所を記憶から引つ張り出すと同時に、今俺が置かれたロケーションとのズレを認識した。

今日の朝は何食べた？……。思い出せない  
昨日の晩は？ その前は？……。わからない  
ここ一週間の、食事以外の要素は何か思い出せるだろうか。……。  
まるで頭が働かない



そこまで考えて、これは夢なのでであると判断する。  
先を知りたいと思うような展開でもなく、世界に興味を失うと同時に、意識はそこで途切れた。

ゴイン！

車輪が石を踏んで跳ねたのか、後頭部が痛くてまた眼が醒める。

「 いたい 」

むくりとおきあがる。

耳の毛を棚引かせるような風に乗し、微かな羽音を聞き取った。  
そっと首を回すと、にだいのすぐちかくをトンボがとんでいた。

意識の奥底で誰かが、蜻蛉が低く飛んでいるときは雨が降る前触れ  
なんだよ、と語っていたのを思い出す。

えっと、 誰に教えて貰ったんだっけ。・・・思い出せない

左手が勝手に動き、右手の袖をまくりあげる。

あっと思ったときには、既に右手は宙を飛ぶ蜻蛉を捕獲していた！

飛んでいる蜻蛉を手づかみにするなんてアリエナイ。・・・あれ？

なんのことはない。

このくらいならいつもやっているしよゆうである。

右手を顔の前に持ってきて、もがく小さな生き物を左目で観察する。バンクにある蜻蛉のデータ全と照合。・・・不具合発生  
認知ルーチン呼び出し・・・修正。これは蜻蛉である。

トンボはきれいないろをしていた。

おいをかごと顔にちがづけたら、はねがバシバシとはなににあたってくすぐったかった。

じゃまだだったので、ひだりてではねをひっぱってみる。

対象の外骨格に、4%の伸びを確認。

ヤング係数及び破断点から、推定破壊加重を算出。

前腕部の筋肉と神経接続にエラー発生。

・・・実測値よりパラメータを修正。・・・実行

羽は、ぷちりとおとをたてて、ねもとになにかをくつつけたままとれた。

ぱいとそれをほうりなげると、ひらひらと風にまっつて、にだいをとおうカバーにくつついた。

くすくす。

たのしい光景だった。

のこりの3まいの羽もひらひらとばしてあそぶ。

右手で摘んでいたのは、奇怪な生物だった。  
程長い胴体に、6本の足。

大きな眼のようなものがふたつあり、ギイギイ軋んでいるような音が聞こえる。

これはなんだろう。

まるで羽根のむしられた蜻蛉である。

ぐるりと指先で向こうを向かせると、無残に抉れた背中が見えた。

うげえ　、こみ上げかけた不快感は、　またきにならなくな  
った。

p h a s e 9

あはは。

じゃまなものをとつたら、棒みたいになった。

これも取ってしまえば、もつときれいになるだろう

ぷちぷちぷち

はげしくうごくこれも、おもったつたよりかんたんとれた。

おー、どっちがまえだかわかんなくなつた

もやしみたいでおもしろい

でもいろはずつときれいだつた。

ふんふんふん

こんどはじゃまされずにおいもかげた。

ちよつとにがそうなにおいがした。

ぺろつとそれをなめてみた。  
すぐくまずい。

飴のほうがいい。

左手で服をまさぐるが、なにもない。

右手を使おうと思ったたら手に何か持っていたので、それを口に含んで腰をまさぐるが、なにも見つからなかった。

うごごと口の中で何かかがくので、ちょっとちよつと舌を動かしてみた。

不味っ。

口から何かはみ出していたので、唇を尖らせるようにしてそれを上に持ち上げて、目玉を動かしてそれを見る。

イメージキャッシュを検索。・・・完了

さきほど捕獲した蜻蛉の尻尾と断定。

ぼんやりと、文字列が目の前を流れているような気がした。

phase 10

突然、背筋を撫で上げられるかのような不快感がこみ上げ、口からそれを吐き出した。

荷車の縁に捕まるようにして、身を乗り出して吐いた。

胃が空っぽだったのか何も出なかったが、ちよつとすっきりした。いくら空腹だったからといって、あんなものを口に入れるなんて全くどうかしている。

飲み込む前に我に返ったのがせめてもの救いである。

「どうした？」

荷車の反対側から、誰かが回りこんできた。

「誰？」

自分の声が変わだが、不思議と気にならない。

あー、思い出した。

彼はマツである。

「まあ良い。状況を説明してくれ」

「なあアニキ、また何か言ってるぜ。どうするよ」

「さっきの作戦を継続しろ。こっちが黙っていれば、言葉が通じないと思って諦めるだろ」

「流石アニキ。冴えてるぜ」

「聞こえてるつての。なんだ？突っ込めばいいのか？」

「なあアニキ、さっきと別人みたいだぜ？。どうするよ」

「っってお前はいちいち俺に聞くな」

「だってアニキ」

「もういい。俺が話をする」

「あんたがこのグループの頭か？」

「グループとは何だ？」

「何言ってるんだよ。あんたたち3人のことだってば」

「そう意味なのなら、確かに俺が頭だ」

「わかった。ぶしつけで悪いんだが、状況を説明してくれないか？」  
軽い頭痛がするので、右手でこめかみを押さえながら記憶を確認する。

「自分の名前はわかる。だが、ここがどこで、自分が荷車の上にいるのかも、あんたたちが何者なのかも思い出せないんだ」

「そう言われてもな」

「いわゆる記憶喪失というものらしい」

「なんだと、　ん？」

男は何かに気がついたかのように俺の顔をまじまじと見つめてきた。

「あんた　　両目共ちゃんと視えてるか？」

「急に何を　もちろん見えてるぞ」

片目ずつまばたきを繰り返し、視界を確認する。  
まばたきに最初違和感を感じたが、気のせいだったようだ。

その後、そいつともう少し話をした。

俺が道端で倒れており、親切な彼らは俺を拾ってくれたようだ。

意識がふたたび減速していく。

耳がはるかなざわめきを拾う。

俺は荷台から身を乗り出し、前方に眼を凝らした。

見覚えのない門らしきものと、立ち並ぶ家々が見えた。

どこかの町に着いたようだ。

その後のことは断片的にしか覚えていない。

せわしく人々が行き交い、やがて俺は荷車から降ろされた。

ふたことみこと言葉を掛けられ、俺は礼儀正しくそれに答えた、よ  
うな気がした。

受け答えの記憶も、断片的である。

とにかく俺は風呂に入れられ、きれいな服を着せられた。

特に協力も抵抗もしなかったらしい。

髪を梳いてもらい、女が俺を飾り立てるのに身を任せた。

トナミという優しそうな女性と、ナガシエという背の高い男の人が  
いた事も覚えている。

その後ぼーっと座っていたら、誰かが俺たちを呼びに来た。

俺は促されるまま木張りの廊下を歩き、人がずらっと並ぶちょっと  
広い部屋に連れて来られた。





## 02 謁見

彼は皇と呼ばれていた。  
オウルオ

でっぴり肥えた巨体と、直径が50cmを軽く超える巨大なアフロが特徴である。

豪奢な煙管を手に持ち、高慢ちき極まりない性格が顔から滲み出ている。

絶対こいつ碌な奴じゃねえ。

周りの人々が一齐に平伏しているなかで、俺だけがぼーっとその顔を見つめていたら、目が合った。

数秒間にらめっこしていたものの、無表情のまままるで反応を示さない俺に飽きたのか、奴は目を逸らした。

儀礼的なやり取りのあと、俺を荷車で運んでいた3人組の一人が口上を述べ始める。

こいつ、誰だっけ？・・・

「此の度は、かの高名なインカラ皇のご尊顔を拝謁する栄誉を賜りましたことは無常の喜びでございます」

あー、チヨ（仮）だ。

無口で口下手な奴だと思っていたのに、立て板に水を流すように流暢に話している。

インカラ皇とやらも満更でもないらしく、鷹揚に相槌を打ったりしている。

それにしてもデカイアフロだ。

俺は、ぼーっとしたまま、何の疑問も抱かず周囲の展開を眺めている。

車上で目覚めてから今に至るまで続いている、気だるい浮遊感は一向に静まる気配を見せない。

肉体の反応はあいかわらず鈍く、非現実感も抜けない。  
しかし、俺がこの状態に慣れたせいかな、新しく気づいた点がある。

この肉体に宿る、“俺以外の何か”の存在についてだ。

俺に何かが憑依しているとかそういう感じではない。

むしろ、俺がこの何かに憑いているといったほうが腑に落ちる。

そいつは眠っているというわけでもないらしいが、積極的にイニシアチヴを取ろうともしない。

明晰な思考や、言語イメージを伴うコミュニケーションがまったく成立しないため、おぼろげな情報しか得られない。

高度な知性も感じない。

まるで動物的な次元のイキモノ、例えば犬。

動物は、鏡に映った己の姿を、自分自身であるとは認識できないらしい。

別の個体がそこにいる、と判断してしまうのだ。

自我の未分化。人間で言えば2、3歳くらいの発達レベルか。

この肉体に宿る何かも、自分自身と俺との区別がっていないらしい。

いことが伝わってくる。

そいつにとつては、俺もそいつの一部でしかない。

そう、俺だけが一方的にそいつを認識し、情報を集めるべく観察しているのだ。

（俺は此処にいる）

そう強く念じてみる。

目を閉じて自己に埋没し、それを繰り返す。

俺には昨日より古い記憶が存在しない。

とは言え、この肉体は昨日生まれたとは思えない。

だから、こいつは何かを知っているはずなのだ。

エイリアンと通信するかのような、あるいは降霊術にも似た稚拙な問いかけも、試す価値はあった。

（俺は此処にいる。お前は誰だ？）

何分経っただろうか。

俺は、その行動が望んだ成果を得られないであろうことを悟り、あきらめる。

（俺は此処にいる）

そいつは、自分がそう考えているとしか判断できないらしい。

自問自答しても、俺の疑問に応える俺の思考だけなのだ。

何も情報を引き出せない。

そいつの名前すら、わからない。

俺の中に、俺の周り（ここ）に、俺の隣にいる同居人。

phase23  
…

俺は、そいつをココと名づけた。

（お前はココだ）

そう念じると、そいつは自分がそう考えたと“考えて”いる。  
だとしたら、アプローチを代えてみる。

（私はココだ。私はココという名前である）

そいつは、素直にそれを受け入れてしまったようだ。

反発すら覚えていないらしい。

素直にも程がある。

おかげで、そいつの本名は結局不明のまま、そいつ（ココ）はココ  
になった。

チヨ（仮）の口上は続いていた。

今年は、天候に恵まれず、収穫量が少なかったこと。

それでも、集落が一致団結して、貢物を用意したこと。

尊敬するインカラ皇への感謝を述べつつ、是非受け取ってほしいと  
嘆願する。

皇は、近くにいる男に話を振る。

「ベナウイ。この男の言ったことは本当にやもか？」

「はっ。今年は雨が多く、晴れた日が少なかったことは事実です。

不作というほどではありませんが、例年より穀物の収穫量は確実に減るでしょう」

「わかったにやも」

皇は正面に向き直ってこう告げた。

「話はわかった。

今年だけ、租を例年の2割増にするにやも」

マツが小さく舌打ちする。

横顔を伺うと、僅かに歪んだ口元から、理不尽な支配者に対する憎しみが伝わってくる。

チヨ（仮）は、相変わらず笑顔の仮面を貼り付けたまま、いや、ちよっただけ悲しげを装って状況に抗う。

「ははーっ。私共も、そうしたいのは山々でございますが、

冬を越すための糧と、来年植えるための種を確保するのが精一杯でございます。

なにとぞ寛大なご采配を。」

全く持って不快な会話である。

何しろ、民を奴隷としか思っていない暴君と、王を微塵も敬ってない狸の駆け引きである。

何度かの攻防のあと、暴君が王手をかけた。

「うるさいにやも。朕に逆らうというのか」

そして、狸は慎重にタイミングを計っていた最後の切り札を切る。

「滅相もございません。」

わたくし  
私共の誠意と忠誠の証として、本日は特別にご用意したものがございます」

そう言って、俺のほうを指し示した。

促されるままにその場で立ち上がった俺を、クソ狸はこう紹介しやがった。

「閣下。どうぞ、この娘をお納めください。  
ごらんのとおり、ナリは小さくとも、稀に見る器量良しでござい  
ます。」

「・・・なっ！」

いやいやいや、ちょっと待て。

それってアレか？

俺はあの高慢ちきなクソデブ王である、アフロ豚の雌奴隷にでもさせられるのか？

たまったモノでは無い。

徹頭徹尾このうえなくお断りである。

あまりの衝撃と嫌悪感が脳内を駆け巡り、心拍数が急上昇するのを聴覚が捉える。

これまで、どう頑張っても拭えなかった、全身を包む非現実感が薄れ、肉体の隅々まで神経が張りめぐされるかのような感覚を覚える。確かに今、自らの足で地をしっかりと踏みしめ、呼吸しているという感覚が蘇る。

phase 24 : starting mode complete

今まで、何の疑問も覚えなかった周囲の世界が、異様なものであることを突然明確に意識した。

この時代劇めいた、異常な世界は、一体なんなのだ。

俺のこのあり得ない肉体は何だ。

そして、どこか聞き覚えのある語彙と、見覚えのあるボンバへ。

懐かしい知識が、この世界観にふさわしいゲーム名を引っ張り出してきた。

皇<sup>オウルオ</sup>が、玉座を立って、ゆっくりと近づいてくるのが見えた。

うお、マジでけえ。

クソデブは、俺のあごに指を引っ掛けて、目を合わせてくる。

「おみやあの名はなんと言っ」

「俺の名前は・・・」

そこまで言っつて、口籠もる。

日本語表記にして、全角 文字。

それが俺の名前だ。

そう、日本で生まれ育った、長年親しんできた忘れるはずもない名前。

でもそれを告げると、永久に何かを失ってしまう気がして。だから、とっさに偽名をでっちあげた。

「・・・名前は・・・ココだ。ココ・・・ナタデココ？」

ちよ、なぜこの状況でそんな単語が飛び出る。

頭にチューリップが咲いてるとしか思えない俺のネーミングセンスに呆れ、一発殴る機会を逃した。

「覚えておくにやも。ナタデココ」

「お、おう」

そう答えると、尻尾を振るかのような喜びの感情が湧きおこる。



それと同時に、いままで存在感の薄かった同居人が、決定的に目覚めたのを感じる。

デブの鼻面でも殴りつけてやろうと手をにぎにぎしていた俺は、今度はココに出鼻を挫かれたせいで何もできなかった。

オウルオ  
皇は、身を翻して王座へと歩いていく。

俺は軽い驚きを持ってそれを眺めている。

一体、この反吐がでるような展開の何処に、俺が喜ぶ要素などあるのか。

すぐに疑問は解けた。

ココにとって、俺の思考と自我の区別がつかないのと同じく、

俺はココの情動に極めて敏感に影響されるということを、文字通り思い知った。

ココが喜べば、俺は薄皮一枚隔てただけのそのナマの感情に晒される仕組みだ。

これは後で到達した結論だが、ココは、誰かに、初めて声に出して名前を呼ばれたのが嬉しかったのだろう。

空気が読めないこと甚だしい。

ちようど、卵から孵ったばかりの雛鳥が、初めて目にしたものを親と認識するかのように。

悪質な刷り込み（インプリンティング）が成立してしまったのだ。ムツクルやガチャタラと同レベルの、本能レベルの“それ”が。

やがて、会見は終わった。

俺を生け贄に仕立て上げたクソ共は、首尾よく租税の据え置き権を

獲得しやがった。

謁見の間に連れてこられる前に、俺の身支度を整えさせた男に促され、宮殿の奥まった区画へと足を運ぶ。

武装した兵士がふたり、アルコール状の詰め所で立っている横を通り過ぎる。

「ここから先が、後宮となっております」

ナガシエのそんな声を聞きながら初めて見た廊下は、やけに薄暗かった。

これが、いわゆる座敷牢のようなものだろう。

誰もいない部屋で、ぽつねんとひとり膝を抱える。

腐っても城。

国家の中枢たる此処では、素性もいまひとつ怪しい新参者を好き勝手に歩きまわらせるほどセキュリティは甘くない。

ほうつ、と息を吐いて、ひんやりと冷たい床板の上に寝転がる。

ストレスは溜まる一方である。

原因については、もはや説明すら不要だろう。

しかも、今後の見通しは全く持ってロクなものではない。

このままいけば、数日以内に奴の寝所に呼び出され、好き放題やら

れるという確定された悪夢が待っているのだ。

俺の意思が介在する余地などどこにもありやしない。

理不尽に殺されるよりはマシだとか、スオнкаスのお花畑の肥料にされるよりはマシだとか、アホなことを考えて頭を落ちつかせる。

落ち着け。

まだいくらかの時間的猶予はある。

さっさとここを逃げ出す算段でも考える。

さて、ここで自分自身の手札を確認する。

当社技術部によれば、当商品の仕様一覧は下記のとおりです。

チビでガリで貧弱です。

目測で140cmを切る全長、30kg台後半の質量、ファイト一発のCMを再現したら10秒持たず転落するほどショボイ筋力。

犬みたいな耳と、ふさふさした小さな尻尾がついた、ガチ獣娘です。

俺がココと名づけたわんこのAIが、感情や肉体制御をほとんど掌握してしまいました。

ココが彼女の意思で俺の好きにさせてくれている場合を除き、俺は強い意志と集中力無しでは眼球くらいしか動きません。

でも、ココには高度な言語中枢がないらしく、口で意味のある言語を話すことに限ってはずっと俺のターンです。

逆に、獣耳と尻尾は、いくら頑張っても、俺の意思では動かすことすらできません。

そもそも、どこに力を入れたらいいのかすらわからないのです。

ちなみに、俺の一人称が俺なのは地です。

リリアン女学園は純粹培養のお嬢様を出荷するそうですが、

同じく異性の目がない我が母校は、女としていろいろ終わってる奇人変人を量産していました。  
お母さんごめんなさい。

それにしても、見れば見るほど細い二の腕である。

掃除機の筒くらいしかねーじゃん。

本来の身長 of 俺だったら、狂喜のあまり床を踏み鳴らすこと請け合いです。

ていうかコレ、格子の隙間から腕突っ込んで、門外かんぬきせるのではないだろうか。

善は急げとばかりに、早速試してみた。

案の定、無理でした。

じわじわと精神を苛む焦燥を抑えつつ、脱走方法をひたすら考える。この城の警備体制も、建物の配置も、外部との出入口の数も、ことごとく不明。

ちよろつとこの部屋を出、ちょこまかとセキュリティサービスをやりすこし、さくつと城外へ脱出し、しれつと安全圏まで逃げ切る。という素晴らしく穴だらけのプランが出来上がった。・・・棄却。

カルラの真似事。・・・実行不可能

極限状況化で、反則的な主人公パワーが覚醒する可能性に期待。・・・

・却下。

賄賂、買収、最終手段として色仕掛け。・・・無い袖は振れません。颯爽と謎のイケメンが現れ、何故か俺に一目惚れする作戦。・・・死ね。

30分は経過しただろうか。

無駄に脳を疲労させた挙句、脱出案もネタが尽きてしまった。  
不自然に高揚していたテンションも、すっかりしぼんでしまう。

「くそっ」

鼻の奥を刺激する絶望感なるべく無視するよう努力して、格子窓の付近にある寢床へ潜り込んだ。

死刑囚は、その時がいつ来るのか知らされないと聞く。

そんな別世界の住人の気持ち、少しだけわかったような気分がした。

予想以上に疲れていたらしく、眠りに落ちるのは早かった。

その夜、ちよつといい夢を見た。

無事この牢獄から逃げ切った俺は、素朴な愛すべき人々のいる農村で保護されるのだ。

俺の持ち合わせている21世紀の知識は、俺だけのもの。

誰も著作権を主張したりしないし、使い古されてすっかり手垢のついたアイデアも、ここでは先進気鋭の革命的なソリューションなのだ。

やがて俺は、“世界初”のટેィベアを製作する。

年端もいかない女の子が、木彫りの呪い人形みたいな怖い骨董品で

おままごとをするこのご時世。

俺のファンシーなデイベアは天井知らずで人気が高騰していく。

やがて、ハクオロが主となったこの城の正門を、チキナロと一緒に堂々とくぐりぬける俺。

今回の力モは、トウカとオボロだ。

初めて顔を合わせるはずなのに、どこか懐かしい面々。

緩む頬をポーカーフェイスで引き締めて、俺は謁見の間へ足を踏み入れた。

首筋が痛くて、目が覚めた。

見覚えのない毛布を寝返りで脇に寄せて、身を起こして、一向に目覚める気配のない悪夢に悪態を吐く。

豎格子の隙間から見える外界は、すっかり日が高くなっていた。

サイドテーブルのような台に、冷えた食事が置かれていた。

寝ている間に、世話係の人間が夕食を置いていったのだろうか。

くおしながき

青野菜が入った、塩気のあるスープ。

お世辞にも かゆ うま とは評せない、謎の炭水化物の冷たい粥。3種類の豆が炒ってある木製の皿。

どろりとした癖のある濁り酒。

王城の食事でこの水準なのだろうか。

豆を口に入れて咀嚼する。

やたら硬い。

機会があつたら、モース硬度を測定してみたい。

我慢して半分くらい食べたところで、ゴリツと嫌な音を立てて歯が軋んだ。

黙つて食器を盆に戻し、片付ける。

添付してあつたやわらかな布で口元を拭き、手を合わせた。

ベッドから両足を下ろし、おもむろに立ち上がる。

「ピッチャー振りかぶつて！ 投げたっ！！」

出入口の格子戸へクソ不味い豆を一粒 全力で投げてやる。

見事にスリットを通過し、遠くの廊下を乾いた音が跳ねていった。

詰め所があるとおぼしき付近で、いぶかしげな話し声が聞こえてきたが知ったことではない。

することが無くなって暇になったら、今度は生理的欲求が気になつて来た。

座敷牢の割には、トイレなど見当たらない。

声を張り上げるのも癪なので、残った豆を次々と廊下へ投擲してやる。

詰め所の喧騒が大きくなって、ひょっこり兵士の頭が覗く。

遠目なので目があつたかどうかは不明だが、ばつが悪くなってあちらからは見えない位置へ移動する。

程なくして、規則正しい足音と共に、昨日と同じ女トナリが現れた。

「食べ物を粗末にするのは、感心できませんが」

眉をひそめてそんなことをたまった。

「朝起きて、一言目がそれか」

「失礼いたしました。おはよう御座います。ナタデココ様」

ちよ、その黒歴史なまえで呼ばないで下さい。お願いします。

「その名前は嫌いだ。ココと呼んでくれ」

俺の心からの言葉とは裏腹に、ココはナタデココでも全然オツケーらしく、尻尾がゆらゆら勝手に動く。

外も内も敵ばかりで泣きたくなる。

「では、ココ様。あとでお召し物をお持ちしますので、お着替えください。」

「わかった。でもな、その前にトイレに行かせてくれ」

「・・・トイレと申しますと?」

「あー、かわや厠、のことね」

「あ、気が利かなくて申し訳ありません。私に着いてきてください」

そう言っしてしずすと歩き出す彼女について部屋の出入り口を出たところで、素足で豆を踏んづけた。

とても・・・痛いです。



厠は、ちよつと歩く程度の距離にひっそりと建っていた。

さて、携帯を落としたら即諦めたほうが賢明であろう空間で用を足しているとき、ふと気が付いてしまった。

第一と第二の難関が今は存在しないということに。

すなわち、格子戸も、複数の兵士もない今が、脱走のチャンスであると。

しかも、いくつもの大小の建物が連なるこのエリアでなら、ちよつと身を隠すにも好都合である。

昨日は結局、まともな脱出プランが思いつかなかった。が、「ちよろつとこの部屋を出、ちょこまかとセキュリティサービスをやりすごし、さくつと城外へ脱出し、しれつと安全圏まで逃げ切る作戦」

見方によつては、この実にいい加減なプランも既に4割成功しているのだ。

逃げ出して捕まれば、確実に己の立場が悪くなるだろうが、処刑されることまでは無い、と思いたい。

この作戦で得るものは自由、失敗して失うものも自由なのだ。

時間はあまりない。

やるかやらないか、10秒で最終決定しろ。

頭の上で昨日咲いてたチューリップをむしりとり、花びらをトイレに捨てていく。

やる、やめる、やる、やらない、逃げる、諦める、特攻する、リスクを回避する、・・・・・・・・やる。  
なぜかキャベツみたいな構造をしている脳内チューリップの花びらの数は、9枚だった。

ぴしゃりと頬を叩いて気合を入れ、軽く屈伸運動をする。  
緊張を押し殺しつつ、自由への扉を開けた。

「お待たせ」

「お気になさらないください。わたしはあなたの身の回りの世話を任せております」

トナミと連れ立って歩きつつ、さり気なく周囲の建物の特徴を頭に叩き込む。

「お前、良い奴だな」

「ありがとうございます」

俺がもし逃げてしまったら、トナミが罪を問われる可能性は高い。  
ちくりと痛む良心から目を背け、右足のサンダル？を前方に飛ばした。

不規則に跳ねたそれが、斜め前に転がる。

・・・あ、明日は雨なのね。

「あつ」

さも驚いたかのように声をあげる俺。  
我ながら白々しい。

「まあ、ちょっと待っててくださいね。すぐ拾って参りますので」  
「・・・トナミ」

そういつて呼び止める。

「・・・すまないな、ほんと」

「うふふ、なに言ってるんですか。このくらいのことです。違うんです。」

そつと左足も裸足になる。

何も知らないココが、無邪気に土の感触を楽しんでいるのを感じる。いまからしばらくは、このコにも俺の邪魔をさせるわけには行かない。

必死で集中力を高める。そして、

トナミがサンダルを拾おうと身を屈めた瞬間を狙い、脱兎のごとく走り出す！

一番近くの建物を目掛けて全力で走り、反対側の死角に走りこんで次の目標へ向かって走る。

30秒もたたないうちに、呼吸がアガりはじめる。

3つ目の建物の角を回りこむときに、ずるつと足が横滑りし、ぐきりと足首がいやな音を立てた。

「あぐつ」

滅茶苦茶痛い。

視界がブレて、涙が滲んだ。

必死であたりを見回しながら走りつつける。

1分でも良い。

脚を休めたい。

しかし、ここで判断を誤れば、即、袋のねずみである。

さつきから遠くにちらほら見え隠れする兵士たちは、飾りではない。

塗壁がどっしりした蔵の横を、足を引きずって駆け抜ける。

痛みが我慢できなくなってくる前に、あまり使われていなさそうな建物を見つけて慎重に駆け寄る。

入り口から中をのぞくと、棚や大きな木箱が沢山目に入った。

・・・合格

足音を立てないように忍び込み、通路から死角になる位置で座り込む。

安堵のため息すら押し殺して、そっと足首を診察しようとしたとき、遠くで銅鑼が打ち鳴らされる音が聞こえた。

・・・カンカンカンカンカンカンカン  
かすかな喧騒ごわめきが、風に乗ってやってくる。

無意味な樂觀論を信奉するつもりなどない。

この騒ぎの原因はどう考えても俺だ。

皮肉にも、騒がしくなったことで解禁された溜息をひとつだけついて、目尻を袖でぬぐった。

よく晴れた青空の下、俺を狩り立てる大捕り物がスタートした。

02 謁見（後書き）

2010年	2010年
07月	06月
26日	27日
一部修正	投稿

### 03 大脱走

よく晴れた青空の下、俺を狩り立てる大捕り物がスタートした。せめて、今日が長い一日になることを祈ろう。

荒い呼吸を静めつつ、手早く足首を観察する。

目を閉じて、足首の痛覚に集中し、くいくいと足首をまわす。

「ぐ・・・いつつ」

はつきり言って痛い。

じっと目を凝らしても、見た目では何もわからない。

ひねってから、まだ赤くなるほどの時間すら経っていないせいかもしれない。

大丈夫、と自分に暗示をかける。

今知りたいのは、骨が折れているか否か。結果はシロ

まだ走れる。

遠くで銅鑼を打ち鳴らす音は、まだ響いている。

大丈夫、まだ走れる。

そつと足を戻し、立ち上がろうとして失敗する。

「あれ？」

傍らの木箱に手をかけようとして、手がカタカタと震えていること  
によようやく気が付いた。

「・・・畜生」

声も震えている。

ココだ。

いくら彼女でも、流石に自分が今置かれた状況は理解できたみたい  
だ。

案の定、彼女はすっかり怯えてしまっていた。

無理もない。

何が楽しくて、命がけで追いかけてこをしなくてはならないのか。

自分以外は全員鬼。

ココにとっては、わけもわからずそんなゲームに放り込まれたも同  
然なのだ。

しかし、今は1秒たりとも無駄には出来ない。

黙りこくって泣き叫ぶココ（からだ）を、意志の力で押さえつける。  
安全圏に辿り着くまでは、悪いが俺の指示に従ってもらう。

もう一度手を伸ばし、木箱を支えに立ち上がる。

ぐるりと体をめぐらせた時に、無骨な足が目の前にあることに気が



付いた

「・・・え？」

「動くな」

顔を上げると、目の前に大きな刃物が突きつけられていた。

意思とは無関係にココが短い悲鳴をあげ、再び腰が抜けた。

「そんな・・・」

接近にまるで気が付かなかった。

充分警戒していたつもりだったが、まだ甘かったのだろう。  
迂闊な自分を呪いたくなる。

集中力が途切れたために、ココが体の支配権を取り戻す。

たちまち涙で滲みはじめた視界を持ち上げると、毛深く太い腕と  
と両刃の剣が真っ先に目に付いた。

その先には、厳しく鍛えられた体、その上には・・・・・・・・クロウ  
の顔がついていた。

「・・・最悪だ」

出会ってはいけないうブラックリストの、上位三指に確実に含まれる  
であろう男。

「一体、なにがどうなってやがるんない」

ぽりぽりと頬を掻きながら、クロウが聞いてくる。

「・・・知るか」

答える義理はない。

俺は今、追われていて、あなたたちから逃げ回ってるんです。なんて敵のボス格に告白する馬鹿がいるわけがない。

「怪しい物音がするから、何かと思って見に来てみれば、ちっこい譲ちゃんが座り込んでるしよ。外は外で騒がしいし」

遂に、緊張に耐え切れなくなったココがすすり泣く。耳はぴったりと伏せられ、尻尾も丸まったままである。

プリミティブな交感神経が活性化し、まずココを征服し、薄皮一枚隔てた俺にも容赦なく攻撃を仕掛けてくる。それに必死で抗う。

俺まで冷静さを失ったら、その時点でゲームオーバーだからだ。

時間がない今は、この男ととにかく交渉をするしかない。

「・・・悪いが、何も見なかったことにしてくれないか。すぐここを出て行くから」

震える声までは制御しきれないが、意思を伝えることが先決だ。

「ああん？見逃すだあ？。」

成る程な、いま外で血眼になって探しているのは、おまえさんだ  
って訳だ」

まあ、余程の馬鹿でもない限りその結論に達してしまうだろう。  
たつぷり7秒、クロウの顔を見つめてから、白旗を掲げる。

「・・・そうだ」

「おうおう、で、一体何をやらかしたんだ？」

「別に何も」

クロウの顔が険しくなる。

見方によっては友好的だった態度は壁を潜め、軍人の顔が取って代  
わる。

右手の剣をだらんとさげ、左手一本で俺の胸倉を掴んで軽々と宙に  
持ち上げた。

「俺を舐めるなよ？ 正直に答えるのが身のためだ。

もう一度だけ聞く。てめえは何をやらかしたんだ？」

パニックに陥ったココがじたばたと暴れるが、奴の豪腕はぴくりと  
も動かない。

俺はもうココのことは諦めて、口を開いた。

「何もやらかしてなんかいない。ただ、逃げ出しただけだ」

「・・・。。。」

「嘘は言っていない。何も知らずに、昨日ここに置き去りにされた  
んだよ。」

何でも、俺は王への貢物なんだそうさ。」

クロウの顔に、唐突に理解の色が宿る。

「ちつ、そういうことか。胸糞悪い」

そつと下に降ろされるが、すっかり腰の抜けたココは、ぺたりと座り込んだまま動けない。

「そういうことだ。頼む、見逃してくれ。」

あんたには絶対迷惑をかけない。たとえ捕まっただとしてもクロウの名前は絶対に出さないと誓う」

「ん？　なんで俺の名前を知ってるんだ？」

あ、やば。

「あんたは、自分の知名度を知らないのか？　あのベナウイが心から信頼する右腕、といえば、クロウに決まってるじゃないか」

ここぞとばかりにゴマを擦っておく。

「へへっ、嬉しいこと言ってくれるじゃねーか」

そりゃそうだろうな。

世の中には、ベナクロに萌える変人もいるのだが、それはあたりは触れないで差し上げるのが武士の情けだろう。

と、唐突にクロウの顔が引き締まる

「事情はわかったよ。ただな」

そこまで言いかけたときに、戸が激しく叩かれる。

「追手か」

俺はひょいっと持ち上げられて、大きな木箱に入れられた。

ここからは見えないが、すたすたと歩いていく音と、戸を開ける音、次いで話し声が聞こえた。

「おうおう、雁首そろえて、どうしたお前ら。報告しろ」

「あ！ 副長。ここにいらっしやったんですか。実は、ついさっき女がひとり逃げ出しまして」

かくかくしかじかと、人の身体的特徴が誇張されて（と俺は信じている）列挙される。

シイイット。セクハラで訴えてやる。

「状況はわかった。残念だが、ここには誰も来てないぜ」

「わかりました。我々は隣へ移動します」

「了解。俺はここをちよつと片付けてから動くわ」

「了解であります。副長も、あとで、隊長と合流してください」

よくわからないが、クロウが庇ってくれたようだ。

付近に人がいなくなったことを確認してから、クロウが戻ってくる。

「助かった。恩に着る」

「んー、まあ、そうなんだけどな」

やけに齒切れが悪いクロウ。

「嬢ちゃんの境遇には同情するけどよ、ここで大人しく俺に捕まっておいたほうが良いと思うぜ？」

「何故だ？」

クロウが説明してくれたが、事態は俺の想像以上に深刻だった。

曰く、素性の知れない新参者が行方をくらませた場合、真っ先に敵対勢力の間者である疑いがもたれるという事。

王城警備隊総出で草の根を分けてでも徹底的に搜索されること。捕まったら、当然厳しい尋問と、あるいは拷問が待ち受けていること。

「でだ、俺なら大将に口添えして、お前さんがそれほど酷い目に合わないように手配してやることができる」

正直、迷った。

クロウの言うことは、ごく尤もだからだ。

「将校の中にはな、上に取り入って偉くなろうとする連中もいるわけよ。」

そういう奴に捕まったらどうなるかわかるか？」

「・・・くそつ。俺が死ぬか“口を割る”まで、延々と拷問するわけか」

「おっと、正解」

「で、そいつは“巧妙に偽装された敵の間者”を未然に捕まえてお手柄、と」

「驚れーた。ガキのくせに頭良いじゃねーか。そういうことだよ。良くわかってるじゃねーか」

どうしようか。

・・・迷う。

クロウが、面白そうに顔を覗き込んできて、こう言った。

「すっかりブルつてると思いきや、話の内容事態は至って冷静だし、頭の回転も速いしょ。」

「実はお前、クロなんじゃねえか？」

「断じて違う。これは信じて貰うしかない」

確かに、外見や振る舞いと台詞がミスマッチなのだろう。体はココの持ち物で、会話は俺口調の俺なんだから仕方ないだろうっつーの。

クロウはしばらく黙っていたが、ふっと目じりを細めた。

「嬢ちゃんを信じるよ。」

ま、その体つきを見れば、何も訓練されていないのは一目でわかる。

それに、嬢ちゃんほど頭が良ければ、無駄に疑われないような話し方をするくらい朝飯前だろう？」

「・・・ありがとう」

やっぱり、人情に厚い、良い奴なのだろう。

「で、俺に捕まるかどうかの決心はついたか？」

ついた。とても悩んだ。

「ああ、見逃してくれ。あとは自力で何とかする」

「おいおい、無駄だ。その足で何ができる」

「逃げるくらいなら出来る」

「よく言っぜ。捕まったらただじゃすまないんだぞ？」

「わかってる。それでもだ」

きっぱりと言い、しっかりと顔を上げる。  
クロウは苦笑して、俺の肩をばんばん叩いた。  
ちよ、力が強すぎて膝からくず折れる俺。

「気に入ったぜ。ま、嬢ちゃんが捕まっても、俺様がじきじきに尋問係になるよう、隊長と掛け合ってやるからよ。  
安心して逃げ回ってくれ」

「・・・ありがとう」

マジで助かる。

ここでクロウに見つけられて、本当に良かった。  
震える膝に活を入れ、背筋を伸ばす。

入り口からあたりを観察していたクロウが、しらばくしてゴーストを出す。

「今なら誰もいないぜ。・・・頑張れよ」

「ちよっと耳を貸せ」

「ん、どした？」

爪先立ちになって、屈んだクロウの頬に軽くキスをする。

「お、おいおい」

「生娘からの精一杯の感謝の気持ちだ。・・・じゃあな」



覚悟を決めた。

いまさら、準備運動は要らない。

そのまま、戦場への扉を駆け抜けた。

成果主義によってギスギスした社会では、その反動として努力を誉めることを推奨する意見の声も大きくなる。

まずは真面目に良く頑張ったということを評価し、そのあとに成果に関する評価も付加する。

ゆとり云々はともかく、子供の情操教育としては一理あるのだろう、多分。

だが、現在、今この瞬間の俺に当てはめるのは全く持って見当違いだ。

あなたは良く頑張りましたが、結局捕まりました、では何の意味もない。

クロウと別れてからせいぜい15分。

ココにとっては、一時間にも匹敵するだろうプレッシャーの中、敵の視線に怯えながら少しずつ場所を移動する俺にとっては、一瞬の時間が経過していた。

建物が建ち並び、ちょっとした市街地のようなエリアを彷徨つ。

迂闊に物陰から顔を覗かせることすら出来ない。

頼みの綱は、聴覚による早期警戒と、敵の状況の推測である。

ココが目覚めてからの聴覚の鋭さは、特筆に価する。

わかるだろうか、90Mは離れているであろう木の葉がそよぐ音が、それなりの解像感を持って聞こえるのだ。

自分の呼吸音<sup>ノイズ</sup>を抑えるために、口で慎重に息を吸う。

軽い体重に加え、角質って何？みたいなやわらかな足の裏は、ほとんど接地音がない。

痛みさえ我慢すれば、小石を踏んで何箇所も血が滲んでいることを勘案しても、優れた長所と断定できる。

挫いた足首に、なるべく負担をかけないように慎重に歩を進めた。一步、また一步を、そろりそろりと、そして、いざという時に無理が利くように。

今、最も重視していることは、敵と一定以上の距離を保つことだ。耳を凝らせば、広い城郭のあちこちで足音が聞こえる。

何度も遠目に見えた敵は、基本的に4人小隊で行動していた。常に、隣のチームを視界に納めるようにしつつ、建物を順番に、丁寧に確認していく。

ふたりが中を改め、ふたりが外で待機する。

間近で発見されたら、即ゲームオーバーである。

しかし、こちらにとって有利な点もある。

具足に硬い材質、もしかしたら金属が裏打ちされている可能性もあるが、足音がよく聞こえるのだ。

4人が行軍していれば、かなり明瞭に聴き取ることができる。

俺が未だに捕まっていないのも、それに気がついたからに過ぎない。

周囲への注意を切らさぬよう注意しつつも、遠い知識を漁る。

“トウスクール城”には堀があっただろうか。

何かの役に立ちそうなエリアマップはあっただろうか。

門の方角等、その他セキュリティホールを突くのに使える知識は無いのか。

足音が一番小さな方角を目指し、近くのチームから発見されないようなルートを細心の注意を持って選択する。

こつちだ。

どうしても姿を晒さなくては開けた場所は、痛む足を酷使して駆け抜ける。

方向感覚などとうに失ってしまった。

目の前の小隊から距離をとるために、戦術的な算段において妥協を重ねる。

気が付いたら、本殿の近くに戻ってきてしまっていた。

「・・・馬鹿か俺は」

最悪である。

どの方角を向いても、間違いなく出口は遠い。

絶望的な防衛戦をすら想定された城とは、そういうものである。

ガチガチに警戒されているであろう外周部に辿り着いても、無事通過できると思えない。

しかし、それでもそこしか突破口は無いのだ。

ゲンジマルが、平和な時期の深夜にそれをかいくぐった逸話など、今の俺には毛ほどの価値ももたらさない。

四方八方の足音は、確実に接近してきている。

ああ、そういうことか。

丁寧に人海戦術を展開し、緻密さ、确实さに重点を置いたフォーメーション。

絶対に逃がさない、という強い意志が感じられる。

一刻も早く敵を始末するための作戦ではないからこそ、まだ俺が逃げ延びていられるというのが実に皮肉だ。

身の上を嘆く余裕もなく、遂に、本殿の目と鼻の先に追い詰められてしまった。

複数の方角から、ちらちらと敵の姿も見え隠れする。

かなりヤバい。

ここで俺はある選択を迫られた。

すなわち、本殿の中に逃げ込むか、城郭の外苑まで徒歩で逃げ切るか、である。

選択肢はふたつ、どちらを選んでも恐らくゲームオーバー。  
却下。

第三の選択肢を考えろ。いや、考えるまでもない。

そもそも、俺はどこから逃げようとしていたのかを忘れてはしない。

チューリップを筆る時間すら惜しんで、俺は本殿の床下へ駆け込んだ。

意外にも乾燥していて、予想通りゴミが多い空間を進む。

大男なら這うしかないこの二次元世界でも、俺ならなんとか手を使わずに歩くことができる。

こぶをいくつか作り、蜘蛛の巣に二度顔から突っ込むことで教訓を学ぶ。

両腕をクロスさせて顔の前に構え、せめてもののバリアを張った。  
視界がさらに悪化する。

奥に進むにつれて光量が激減していくが、夜目のスペックがそれを必死に追撃する。

頭の上を、誰かが駆けていく音が聞こえた。

「・・・っ!!」

無事だったほうの足で、釘を踏んだ。  
悲鳴を押し殺したまま悶絶する。

頭の中で10秒だけカウントし、体に鞭打って前進を再開した。

既に、目的はただの時間稼ぎになってしまっている。

脱出の見込みは、もう潰えた。

ただの意地で、一秒でも長く逃げ切ることを心に誓う。

そう。

結果は伴わなかったけど、限界まで頑張ったんだ。

お前は大人だろ？

思い通りにならない現実なんて、これが初めてではないだろ？

そう弁解する俺と、それを嘲る俺がいる。

すっかり疲弊し、失意しているココは、自分から主導権を放棄した  
みたいだ。

・・・ごめん。もうちょっと我慢してね。

俺の強行軍は、最終ステージに突入していた。

体力ももう限界だ。

身を隠せるような奥まった物陰を探し、そこに座り込もう。そして、ほとぼりが冷め、奴らが諦める可能性に全てを託すのだ。

あの随分と大きな障壁は、地下室に降りる階段室なのかもしれない。ある程度地下の構造を覚えてくると、そんな推測も成り立つようになってくる。

地下の倉庫も複数存在するようだ。

尤も、シャフトが通っているのは床の上と地下なので、床下からは侵入など出来るはずもない。

危うく穴に落ちそうになって、ぎりぎりのところで踏みとどまる。

ばくばくする胸を抑えながら、小石をひとつ落としてみた。耳を澄まして、何も聞こえない。

今度は、やや大きめの石を投下してみる。

0・5秒くらいして、ぽすつと音が聞こえた。

穴の直径やふちの構造から察するに、頭上の本殿を建築する際に放棄されて、既に枯れた井戸なのだろう。

少なくとも、ここに落ちたら自力では出られないのは確信できた。

ああ、数カ月後も生きていて、耐えがたい日々に我慢しかねたら、ここまで来て身でも投げよう、などと考えつつ、手探りの搜索を再開した。

井戸の底ってどうなってるんだろうな！。

やっぱり、頭蓋骨があったり、蛇がいたりするのかなあ。

穴のそこから見える青空って、ものすごく綺麗なんだろうなー。  
ぷぷっ、床下で空も何もないだろ、ってオイ。

現実逃避をはじめて約2分、脳裏を掠めたアイデアがあった。  
待て、今何を考えた？

ナ・トゥンク シナリオをよく思い出せ。

ハクオロ一行が潜入に使ったルート。

城の外から、内部の中枢まで一気にショートカットする裏ルートの存在を思い出せ。

“ トウスクール城 ” にそれが存在しない理由などない。

そう、極秘の脱出ルート（・・・・・・）を探せ。

絶対にある筈なのだ。

現金なもので、すぐれる希望が見つかった、落ち込んでいた思考がわずかに上向く。

今まで通り過ぎてきた、石造りのシャフトらしきものの姿かたちを思い出せ。

ひとひとりが通れる位の、小規模な竪穴を探せ。

ぐると四周を見渡す。

立ち並ぶ柱でほとんど視界は通らないが、場所によっては明るいスリットが、遠目に垣間見える。

床下に駆け込む際に見た、本殿の外観を思い出せ。

王の居室は、頭の上のどのあたりに位置するか推測しろ。

必死で頭を回転させつつ、右往左往する。



いままで通り過ぎて来たところも戻ってみたり、小休憩を挟んで情報を整理したりする。

眼を凝らして手がかりを探せ。  
考えろ。

王の生活空間は、ここからきつと半径50mのなかのどこかだろう。駄目だ、もっと搜索範囲を絞り込め。  
せめて半径20m。

精密に調べていくには、その程度が限界だ。

不安を無視して強引にあたりをつけたエリアを調べていく。  
四つん這いになって、地表のテクスチャを確認し、こつこつと握りこぶしほどの石で叩いて回る。  
下から床組みを見上げる。

たちまち、膝が擦りむけた。  
手のひらに血がにじむ。

上を向いたときに、ぱらぱらと埃が目に入るが、汚れきった手ではぬぐう事すらできない。  
下を向いて、涙で洗淨する。

たいした成果も得られぬまま、いたずらに時間が過ぎてゆく。  
ゆっくりと心を再侵食する暗い色。

ヤマを張った範囲を探し終えた。

出口は見つからない。

怪しいシャフトはいくつかあるのに、その内部へアクセスする隙間など存在しない。

まあ、これが妥当な結末なのかもしれない。

床下に潜っただけのヤツが、簡単に発見できるようでは、“極秘”などとは呼べるはずもないからだ。

しばらく前から、頭上を歩き回る人間の数が大幅に増えていた。きつと、あちらの作戦も最終フェイズに突入しているのだろう。

そんな時、床下の空間にも何人もの男の声が聞こえてきて、心臓が跳ねる。

四方八方からである。

大声で怒鳴りあって、互いに連絡をとりつつ、組織的に床下を網羅するつもりようだ。

暇人共め。

たかが小娘ひとりに、そこまでするか普通。

愚痴っても仕方がない。

これで最後の猶予が、多めに見積もっても残り数分になってしまう。

もう、新しいヤマ場を調べる時間もない。

どの方角へ向かってても敵がいるため、この2次元世界の出口は無い。

床組みを観察していると、時折無意味に二重の四角で囲まれた個所を見かけた。

あれはきつと、その部分の床板が外せるようになっていたのだろう。

いわゆる床下点検口と言うやつだ。

そのどれかから本殿の中に入ることを検討する。  
どうせ死ぬなら、前のめりに死ね。

つて以前どこかで誰かが口にしていた気がする。

そう、前向きに検討しろ。

床の上へ向かうのは、敵に白旗を掲げに行くためではない。  
極秘の脱出ルートを、今度は建物内部から探すのだ。

さっきの搜索エリアには、合計3箇所の“床下点検口”があった。  
どれかを選ぼう。

目的は、怪しいシャフトを床の上から確認することである。

そこまで考えて、ひとつだけ、石積みの壁のすぐそばに配置されていた点検口を選び、真下へ移動する。

つま先立ちになり、木の棘が刺さるのも構わずに耳を押し当てる。

よし、今足音はしない。

しっかり足を踏ん張り、両手を天に突っぱる。

某国民的アニメEDに合わせて、お尻をふりふりしたくなる衝動を  
覚えて苦笑した。

重い。

ぎしぎしと手足の間接が軋む。

その間も、怒鳴り声の包囲網は狭くなっている筈だ。

息を止めて、全力で力をこめたら、一瞬<sup>ちよつと</sup>板が浮いた。

もう一度力をこめて、なんとか板をずらすことに成功する。

1分間かけて完全に開口部を広げ、両手でふちにつかまって息もたえだえに這い上がる。

その部屋は暗かった。

ぶ厚く埃が積もっていて、いくつかの剣や服などが積んである。

そして、何より驚いたことに、出入り口が存在しなかった。

床にあいた石造りの井戸のような穴と、いま這い上がってきた木の床の羽目板以外には。

勝った！

埃を吸い込んで咳き込みそうになるのを、涙目ながら必死で堪える。ご都合主義だろうがもうどうでも良い。

ずりずりと床の穴を元通りにして、ちょっと休憩する。

床の穴はびつたりと嵌まり、もう指を引っ掛けて持ち上げられそうな手がかりはない。

間違いない。

たまたま、極秘の脱出ルートに出くわしたのだ。

この部屋は、ある種の逆流防止弁である。

井戸から出てきても、床の穴には入れないが、逆は容易なのだ。

したがって、このルートを逆にたどってきても、簡単には進出出来ないという強制的な一方通行が成立する。

王が逃げたあと、地上から本殿を制圧した敵が脱出路を探しても、まず見つからない。

そりゃそうだ。

建物の中からは、直接ここにはこれないのだ。

どこか別の点検口から一旦地下の迷宮に降り、いくつもある点検口の中から正しくこの部屋へ到達しなくてはならない。

まったく良く設計された仕組みである。

名も知らぬ建築家へ惜しめない賛辞を送る。

口封じで竣工直後に処刑されたりしたら可哀想だけどな！

## 04 川辺にて

かつんかつんと、手元から剥がれた小石が落下していく。

”井戸”の中には、“クワの頭”ほどもあるクサビと、クナイくらのクサビが点々と打ち込んであった。

真つ赤に錆びたそれが、血も乾きかけた手のひらに新しく傷を作って行く。

這い回るときに手をついた個所と、体重を支えるために捕まる皮膚が、互いに少し離れているのが不幸中の幸いである。

今まで軍手なるアイテムを馬鹿にしていたが、アレが切実に欲しくなる状況って存在するんだな、などと考えつつ、ようやく底に降り立った。

淀んだ空気の中に、ほんのわずかな“草いきれ”を嗅ぎ取り、精神が高揚する。

苦労して勝ち取る自由というものが、こんなに尊いとは思っていなかった。

空気の読めないアメリカ人とだって、いまなら肩を組んでビッグマツクを貪り食える自信があるよ！

そこからの道のりは、床下の混沌に比べれば遥かに楽だった。

叩けば崩れそうな壁も痛む足の皮膚も刺激しないように、そつと歩を進める。

閉所恐怖症の人には絶対無理ですね、ここ。

籠城に備えて、水源のなかったエルサレムの市中に飲み水を確保す

るために、ウン世紀に掘り抜かれたという地下水路の入口の写真を撮ったことがあるだろうか。

あれをイメージして貰えれば情景把握はばっちりである。

結構な距離を歩きに歩いて、ようやく光が見えてきた。

出口もやはり井戸だった。

こっちは、まだ現役らしい。

深い井戸の横穴から下を覗くと、ゆらゆらとした水面が見えた。見上げれば、地上までざっと6？。

ここを登りできれば自由の世界である。

よくやった。

体力はとうに尽き果てていたが、もう構わない。

予備の燃料タンクも、残弾数もぜんぶここで使い切ってしまうおう。

どこかから、小川のせせらぎが聞こえてきた。

外に出たら、まず手を顔を洗おう。

オーヴァーハングした岩で、横穴は巧みにカモフラージュされていた。

手がかりとなる金属製のくさびもここには打ち込んでなかった。

その代わり、石をひとつひとつ削って拵えたであろう手がかりがこしらえてあった。

体が小さいため、反対側の壁までフルに使って姿勢を安定させることができない。

あとは根性だけだ。

残り3？

希望の見えない苦境は心を折るが、希望さえあればどんな苦難をも耐えようという力になる。

高揚しっぱなしの精神と、ふんだんに供給されるアドレナリンが体を押し上げる。

昨夜、部屋でファイト一発のCMの撮影をしたら、10秒で落下するなんて考えた奴出て来い。

今はどうだ。最悪のコンディションで、もう40秒も持ちこたえている。

・・・あと2？

右手の薬指の皮膚が破れて使い物にならないので、人差し指と中指の二本で取っ掛かりをつかむ。

限界まで腕立伏せをこなしてから、さらにもう一回だけやる時の心境で、もうひとつ上の手がかりを探した。

地面から50cm程度立ち上がっている井戸の周りは、うつそうとした茂みになっていた。

川沿いの森林の中にあるようだ。慎重に無効を伺うと、街をぐるり



囲む街壁と、物見やぐらがふたつ見えた。  
あとは遠ざかるだけだが、その前にまず体中を洗おう。

水は冷たかった。

都市にこんなに近いのに、透明度が高い。  
カミユが蛍と戯れていたのはここだろうか。

服を着たままじゃぶじゃぶと川に入る。

全身の傷口を水流が洗っていく痛みすら心地よかった。

頭まで浸かって目を開けると、髪の毛が水草のように流れに乗る。  
目を閉じると、ふっと意識が遠のいて溺れそうな機がしたので、名  
残惜しいけれど早めに出ることにする。

その時、馬の蹄が、河原の丸石を踏みしめる音が水音に混じった。  
ヤバイ。

川の中ほどに突き出ていた岩の陰に隠れる位置へ移動する。

鼻から上だけ水面から出してそつと伺うと、その誰かは例の“井戸  
”を調べているようだ。

危なかった。

あそこで座り込んでいたら、おそらく捕まっていた。

俺は自分の度重なる幸運に感謝して・・・

不意に、ちゅぷんと水が跳ね、鼻からがっばり水が侵入する。

激しく咳き込みつつ、俺は自分の度重なる不運を呪った。

「まさかとは思っていましたが、ここにいましたか」

怜悯な風貌のイケメンは開口一番にそう述べた。

彼は開けた川岸で、馬・・・いやウオプタルに跨っている。

一方、こっちは川の中で丸腰。

しかも、下流には街から出入りする橋も見え、泳いで逃げることも不可能。

体力はもう何度も限界を超えた。

真の意味でゲームセット。

舌を噛むか、投了するしかない。

しばらくにらみ合っていたが、俺はうな垂れて男の元へ向かった。

「クロウがやけに貴女のことを買いかぶっていたので、念には念を入れてここを見に来たのですが・・・」

正直、貴女のことを侮っていたようですね」

この風貌、クロウすら呼び捨てにする軍位の高さ。  
見まごうはずもない。

「はぁ・・・、ベナウイ・・・か」

「失礼しました。いかにも、私が侍大将のベナウイです」

わかりきつてることを、敢えて尋ねてみる。

「ここへ何しに来たんだ？」

「・・・。万が一に備えての保険だったわけですが、まさかこれが決め手になるなどは考えてもいませんでした」

「・・・あんたは、アレの存在を知っていた、というわけか」

「いかにも。先代からが亡くなられる少し前に、口頭で教えられました。」

おそらく、インカラ皇ですらご存じ無いでしょう」

「文武両道、完全無欠の侍大将、か。・・・バケモノめ」

「その言葉、そっくりお返ししましょう。」

初めてつれて来られた未知の環境で、あの人数の包囲網を、あれだけの時間かわし続けた的確な状況判断力。

その小さな体で怪我までしていたのに、諦めずに行動を続けた精神力。

普通ではまず発見できるはずもない脱出ルートを算出した知性。

どれも見事というほかありません」

「ベタ褒めですか。そのついでに、見逃してもらえると助かるんだけど。」

あの中で目にしたことは誰にも語らないし、二度とこの都市に近づいたりもしないから」

「・・・そうですね。」

当初は、クロウの意見もありましたし、状況によっては見逃そうとも思っていました。

が、考えが変わりました。貴女は・・・・・・・・信用できない」  
「マジかよ」

交渉は決裂だ。

勝てる見込みなど皆無であることを重々承知の上で、握りこぶしくらいの石を、両手にひとつづつ握って、身構える。

「何のつもりですか？」

「見れば判るだろ。俺が逃げるためには、ここであんたを倒すしかないんだってことくらい」

「馬鹿な真似はおよしなさい」

クソツタレ。

この男、心からそう言っていていやがる。

「ハッ。馬鹿だと？」

お利巧なてめーなら察しがつくだろ？

俺は何も知らずに連れて来られた無力な小娘で、あの白ブタ野郎に売られたんだってことくらい。

俺が自分の貞操を守るために、どんな覚悟で逃げ出したか考えたことあるのか？。

それを馬鹿な真似で片付けるのかよ！！」

「・・・少々誤解が交じっているようですね。

私が言いたかったのは、立っているのもやっとのその体で、この私に挑む愚かしさを、

貴女ほどの人物がわからぬわけはあるまい、という点です」

「同じだっつーの！！」

怒りに任せて、右手の石を投げつける。

力なく飛んだそれは、顔を狙ったはずなのにベナウイの胸に当たった。

避けるそぶりすら見せない奴の余裕がいらだちを煽る。

地面に落ちる前に、難なく掴み取った掌中の丸石を一瞥して、ベナウイが顔をしかめる。

「手も怪我している様子ですね。血が滲んでいますよ」

「・・・」

あくまで構えを解かない俺の姿を見て、ため息をついた侍大將はウオプタルから降りた。

「仕方ありませんね。力づくで連行させて頂きます」

「おいてめー、あの槍は使わないのか？」

「・・・よくご存知ですね。」

心配は不要です。あれを使わずとも、丸腰の女子供に遅れをとったりはしません」

「馬鹿にしゃがって!!」

力を振り絞って地を蹴り、何も持たない右こぶしを叩き付ける。

俺の全力の一撃は、目的を果たす前に、あっさりと空中で摘み取られてしまった。

「いつつ」

普通に掴まれただけなのに、既にボロボロだった右腕が激しく軋んだ。

最初の一撃が通用しないことくらい、俺にだって判っていた。握りこんだ石ごと振りかぶって、左でベナウイの細い顎にアッパーフックを放つ。

脳を揺らしてなんとやらを狙っていたのだが、奴がひょいと顔を上げただけで、虚しく空を切る。

両腕を交差してしまった不安定な姿勢のまま、奴と視線が一瞬交錯した。

「失礼します」

そう聞こえた時には、視界がぐるりと猛スピードで回転し、背中から川原に叩き付けられた。

「かはっ」

肺の空気が全部押し出されてしまったのに、痛みで息が吸えない。まだ腕をつかまれたままである。

そして、地面に叩き付けられる直前に、くいつと腕が引かれて、明らかに手加減されていたことを遅れて脳が理解した。

「・・・チクショウ」

とめどなく溢れる涙をぬぐう事も許されぬまま、俺の心は完全に折れた。

3分もしないうちに、  
ベナウイの外衣でミノムシになった俺は、俵か何かのようにウオプ

タルに積まれたまま、門をくぐった。  
ベナウイが、兵のひとりに何か告げると、太鼓が打ち鳴らされ、俺捕獲作戦は終了した。

そろそろと兵が集合する音が聞こえるが、俺は顔を上げられない。  
ああ、これじゃ良い晒し者だよな・・・。  
しかし、ちっぽけなプライドを守る空元氣すら残ってなくて、ココが泣きじゃくるのに任せる。

5分ほどして、クロウもそばまで来たようだ。

「ははっ、まさか大将が街の外で拾ってくるとはな。おったまげたぜ。」

このお嬢ちゃん、空でも飛べたんですかい？」

「クロウ、この件は内密にお願いします。」

門を抜けようとした飛び出したところで、私が捕まえた。そういうことにしておいて下さい」

「わかりやした。それにしてもなあ」

そういつて、ごつごつした手が頭を撫でて行く。  
もちろん俺は無反応である。

「全身を何箇所も怪我しています。早急に治療が必要でしょう。  
クロウ、彼女を運んで、トナミに診せてください。」

私は兵士たちへの指示及び緘口令と、オウルオ皇への報告を行います。話

はその後で」  
おっす  
「了解」

体が持ち上げられ、運ばれるのを感じる。

うつすらと目を開けると、クロウの顔が目の前にあった。

「そう落ち込むなって。相手が悪かったただけだぜ。

うちの大將がいなけりや、今ごろお嬢ちゃんも自由の身だったのによ」

「・・・うるさい黙れ」

「それだけ口が聞ければ大丈夫だな」

「んなわけない・・・」

「ははっ、悪い悪い」

本殿が見えてきた頃になって、ばたばたと誰かが走ってきた。

「ココ様っ！！」

「待たせたな、トナミ」

「クロウ様もお疲れ様です。それより、ココ様はお怪我ありませんか？」

挨拶もおざなりにまくしたてる。

「・・・。。あー、それなんだけどな。大將いわく、あちこち怪我しているそうだ」

「っ！！。クロウ様、急いで付いてきてください」

「はいはい」

揺れるピッチが早くなる。

「そんなに揺らしちゃダメです！ もっと優しく運んであげてくださいー！」



「あ・・・ああ。すまん」

いくらか楽になる。

程なくして、外衣とあちこち破れた服を解かれ、柔らかな寝台に横たえられた。

「ヒュー、手も足も見事に血だらけだな。それにしても、足の裏なんか酷いもんだ」

「・・・こんなになるまで追い掛け回したのですか、クロウ様たちは」

「俺に言われてもなあ。気が進まなくても、それが仕事だし」

「こんな小さな娘が相手でも？」

「それが規則なんだから仕方ないだろ。」

犬を放つことだけはなんとかして止めさせたんだけどな。

あんなもんに襲われたら、このお嬢ちゃんじゃあつという間に噛み殺されちゃう」

「当たり前ですっ!!」

「・・・見れば見るほど細っこい体してるぜ。見るよ、太ももののに、俺の肘くらいしか無いぜ？」

「っ!! 男の人はすぐ出てっってくださいっ!!」

「おいおい、俺がここまで運んできたんだぜ。ちよっとくらい眼福があつたってバチは当たらないだろ」

「当たりますっ!!」

「あ、こら、押すなって。はいはい、わかったわかった」

クロウが去ると、途端に静かになった。

「ココ様。ココ様。聞こえますか？」

「・・・聞こえる」

「今からお怪我の治療をいたします。

お辛いところ申し訳ありませんが、怪我したときの状況を、覚えてる範囲で良いので教えてください」

うえ、何気にキツいきついことを要求してくれやがります。この女<sup>アマ</sup>

とりあえず、トナミと別れてからすぐに、右足首を捻挫したところから始める。

トナミの頬が、ピクピクした。

その状態で時々全力ダッシュを繰り返し、何回かすっ転けたこと。

暗闇で、体のあちこちをぶつけ、釘や破片も踏んだこと。

そんなところを、生傷を増やしつつ散々這いまわったこと。

傷口を消毒していた脱脂綿のようなものを、ぽろりと取り落として、新しいものに代えるトナミ。

極秘ルートのことはさすがにこまかしつつ、つい先刻までの苦行を思い返していく。

重量物を思いっきり動かしたりしたこと。

赤錆の浮いた鉄片を手に食い込ませたりする、無茶なクライミングを強行したこと。

ピンセット代わりに使っていた箸を、片手でべきりと折るトナミ。  
・・・怖えーよ

あと、侍大将と殴り合って、背中から叩きつけられた事とか。  
あー、怒ってる怒ってる。

「・・・ベナウイ様」

炎を背景にしたトナミがプルプルと震えだしたので、ちょっと弁護  
してみる。

「あ、いや。俺も散々挑発したしさ・・・」

うわ、何？　ぎゃああああああああああ

ぐざりと鼻フックを極められる。

「いはい！　ほれいはいつてー！！」

「ココ様！！　わたしはあなたにも腹を立ててるんですー！！」

ギリギリギリ・・・ミシ

ああああああああああああああああ

「嫁入り前の娘が、そんな無茶をするもんじゃありません！！  
顔に傷でもついたらどうするんですか」

いやその、嫁入り前だからこそ必死に逃げたわけでした。  
ちなみに、額とか頬とかそれなりに怪我しました。

「大体なんですか！　わたしを騙してまであんなことして！」

あ、その節はどうもすみませんでした。いやホントに。

「わたしに相談してくれば、協力くらいしてさしあげたのに!!」  
も、問題発言ですそれ・・・

そんなこんなで、俺が包帯でぐるぐる巻きになるまでに、心身ともにさらに消耗しますた。

## 05 虜囚

狭い独房の中は換気が悪く、じめじめとしていた。

恐らく、この地下室よりも地下水位のほうが高いのだろう。

あの茶番劇から二日経った。

日の光が全くないので、あくまでも推定値でしかないが。

間接や傷の痛みは、特にひどかった数箇所を除けば概ね引いた。

一方、筋肉痛は微妙に抜けきってはいない。

あの時軟禁されていたときより、当然ながら待遇は悪い。

ちよつと歪んだ四角い空間に存在するのは、排泄用の陶器の容器と、トナミがごねて差し入れてくれた一枚の毛布のみ。

俺の美学によれば、固い床の片隅で膝を抱える図式は絵になるが、自分がそれを実行するとなるとまだ微妙である。

ずっと接地しているお尻が痛むのだ。

同様の理由で、長時間仰向けに寝ていると、後頭部や肩甲骨が痺れたように痛む。

研究の結果、毛布を敷いてその上にうつ伏せになるのが一番楽であることを突き止める。

あれだけの騒ぎを引き起こしてしまったことを後悔しているわけではないが、正直、今後の展開もさっぱり読めない。

今はまだ、体を癒し、長期戦に備えることしかできない。

危惧したような尋問は無く、ベナウィが檻越しに詰問してきただけだった。

この世界で目覚めてからの記憶には隠すようなことも無いので正直に答えていく。

でも、必要以上に協力的な態度をとる義理だって無い。

そんな生活は、数日後に終わりを告げた。

牢<sup>ひびや</sup>から開放されて、自由になったなどと素直に喜ぶことなどできない。

ついに、アフロ豚<sup>インカラ</sup>の夜伽に呼びつけられてしまったのだ。

見覚えのある浴室の間で、体を洗う。

少し離れたところから、ナガシエが鋭い目つきで俺を見張っている。  
当然こちらは全裸<sup>すっぱんぼん</sup>だ。

意識レベルが低空飛行だった初日とは違う。

・・・クソ、じろじろ見てんじゃねーよ変態。  
さっさと終わらせてやる。

「終わったよ。拭くものをくれ」

「そうですか」

ツカツカと歩み寄ってきて、俺の手ぬぐいが取り上げられる。

「な、なにするんだよ」

「まだ、傷が完全には癒えていませんので、一部は大目に見ましよう。ですが・・・」

「ひゃっ おいてめー。どこ触ってやがる!」

「武器や毒物の身体検査です」

無遠慮に“後ろ”そして“前”をこすられる。

奴は、自分の服が濡れるのもお構いなしに、俺の下腹をぐいぐい押し異物を探す。

もう片方の手で、あっさりと手の自由が奪われてしまったため、まともな抵抗もできなかった。

屈辱以外の何物でもない。

「ぐっ、このヤロウ。オウルオ皇の女にそんなことをしてただで済むと思ってるのか」

「ああ、あなたには言ってますでしたね。私は宦官カンガンです。いつ何時でも、皇の禁裏にすら出入りが許されています」

予想の斜め上に行く切り替えしで、毒気が抜かれた。

「ハア?・・・ああー」

宦官って何だっけ?

あー、思い出した。

外科的手法によって去勢された、玉キハを抜かれた男、いや男でも女でもない生き物だった。

ちよとカツコイイ。

いつ何時でも、如何なる場所だろうと出入り自由だつて？  
やっとな渡してもらえたタオル？で頭を拭きつつ、奴を睨み付けた。

「へえ。随分とお偉いじゃねーか。尤も、ベナウイの名前は聞いたことがあつても、てめーの名前は一度も聞いたことないけどな」

これは半分本当である。

かの作品の記憶はそこそに残っているが、こんな奴知らない。

「それはそうでしょうね。

わが一族は、代々皇家にのみ御仕えしています。

外交や内政問題、軍事的な事柄には興味はありません」

「ははん。いかなる利害にも絡まないから、脅迫も買収もしにくいわけだ」

「はい。我々が皇家を裏切ることとは絶対にありません」

「けっ、飼い慣らされた犬め」

俺がそう言つと、奴はまじまじと俺の顔を見る。

「・・・先日とは、随分と印象が変わりましたね」

「う、ちよつとした事情があるんだよ」

はあ、まるでセバスチャンとかダニエルみたいな奴である。  
長瀬一族のようん・・・ん？ナガシエ？・・・あ。  
こいつ長瀬の人間かよ！

ウマヅラじゃないから全然気が付かなかったぜ。

ああ、こいつには人と同じ二次成長がなかったのか。



長瀬ちゃんが、ウマヅラにならずに年を喰ったらこんな感じか。  
人類滅亡を乗り越えてきたとは、鬼の遺伝子でも取り込んだの  
うか？

こいつに、いろいろと興味が出てきた。

「てめーら、宦官なんだろ？ どうやって一族を存続させてきたんだ？」

女として割とデリカシーに欠ける質問だが、構うものか。  
今しがた、こいつにされた事は忘れるものか。

デリカシーのなさならこいつも鉄板だ。

「・・・女兒が産まれると、その者が血筋を引き継ぎます」  
「なるほどな」

「さあ、もう充分でしょう。インカラ皇がお待ちです」  
「うげ・・・」

やっぱりこいつも敵だ。

13段の上にぶらさがった縄を幻視しながら、最後の階段を昇る。  
流石に俺も、口数が減る。

あれこれと夜伽の注意事項などを聞かされる。  
あー、これ白けるわ。

某中国で、結婚する若い男女に義務付けられているという、バツの悪さで悪評の高い性教育講習に匹敵するだろう。

「聖上、ナタデココ様をお連れしました」

豪華な部屋の奥では、アフロが杯を傾けていた。

「うむ。おみやーはもう下がって良いぞ」  
「はっ、それでは」

ナガシエが、控え室に引つ込む。

なんでも、万一に備えてそこに常駐するらしい。

当然、この部屋の音声など逐一チェックされている筈でありこん畜生。

ココは黙って俺の好きにさせている。

どうやら、ここ数日で教訓を学んだらしく、自分の手に負えそうもない状況では大人しくしていることにしたようだ。

たしかに賢明だが、豚の下の世話まで俺に押し付ける気が薄情者め。

「あ・・・、えっと」

さっき教えてもらったばかりの口上が綺麗さっぱり思い出せない。

・・・やば

仕方ないので、ネトゲで良くPTを組むお水のコに、「冗談半分で教えてもらった台詞で代用してみる。

余談だが、彼女はムキムキマッチョなデストロイヤーがお気に入りだ。

「このたびは当店にお越しいただき、誠にありがとうございます。改めまして、ナタデココです。

至らぬ点があるかもしれませんが、精一杯頑張らせていただきますので、よろしく願います。

本日はどうも、ご指名いただきありがとうございます」

「な、なにを言ってるにやもか」

ちょっと面食らったインカラも、すぐ表情を戻す。

「苦しゅうない。ちこう寄れ」

うわ、この台詞を本気で耳にする日が来るなんて夢にも思ってたせんでした。

嫌悪感をうつかり表に出さぬよう気をつけつつ、すぐそばまで寄る。

「おみやー、来て早々勝手に逃げ出したそうだな」

「あ、あははは・・・」

やっぱりそこ突きますか。

「無駄なことをしよる。本気で逃げ切れるなどとおもっていたにやもか？」

「いえ、気が動転していて、あのこととはよく覚えてないんです」

「なぜ逃げた」

貴様がキモくて、死んでも良いからここ以外のどこかへ逃げたかったんです。

なんて言えるはずもない。

・・・考える。

不必要なトラブルを招かない切り返しはなんだ？

スイッチを切り替え、俺は“ココ”を演じる。

びくつと身を震わせ、上目遣いでしどろもどろに早口で弁解する。

「あ、あの、食べないください。

逃げたことは謝りますから、なんでもしますから、私を食べないください。

ま、不味いと思いますよ」

「別に、とって食ったりはしないにゃも」

「?? そうなんですか? だって、ミツギモノだって言ってたし」

インカラがにやにやと嫌な笑みを漏らす。

「全く、生娘だとはいえウブにもほどがあるにやも」

「・・あつ、なにを」

「こんな怪我までこしらえおって」

ぐいつと手を引かれ、寝台の上に横たえられる。

慣習だとかいう理由で、透け透けのネグリジェみたいなものしか与えられなかった俺は、もうまな板の上の鯉だ。

簡単に足を広げられ、固定されてしまう。

奴の指は、自信たっぷり、かつ問答無用に這い回る。

遠慮の欠片もない。

こういうところ、本気で王様だと思う。

「ああ、そんなところ・・・汚いです」

やけくそで演技を続ける俺。もうどうにでもなれ。

不意に、愛撫がやみ、ばんと顔のすぐそばに手が突かれる。

「あの、聖上?」

「白々しい演技は充分にやも!」

「?」

なんでこいつは怒ってるんだろっ。  
好きに犯しゃいいじゃねーか。

「家来たちが口を揃えていたにやも。貴様は油断ならないとな」

「?? なんのお話ですか？」

「おみゃー、朕を馬鹿にしているのか!!」

「ええ、かなり」

いきなり横つ面を殴られた。

視界がズレ、無意識に悲鳴が出た。

「何をしゃがる。白ブタ早漏野郎」

もう一発、反対側から殴られる。  
頭が吹き飛ぶ。

「いつつ。マウントポジションでぼこすか殴るんじゃねーよ!」

そもそも、体重は軽く3倍違う。

しかも男と女では、対等な喧嘩など成立するはずもない。

とどめの一発に備えて腕で顔をガードするが、何もこないので薄目を開けた。

じっとインカラが目を覗き込んでいた。

しばらく睨み合っていたら、奴から口を開いた。

「それがおみゃーの本性だな？」

「てめーは見た目通りのブタだな、中身も」

「口の聞きかたに気をつけろよ？ 朕は皇にやも」  
「よく知ってるよ」

思っていたほどインカラも阿呆ではないようだ。  
性格は思っていたよりもさらに悪いが。

「もう一度だけ聞くにやも。なぜ逃げた？」

俺の堪忍袋も既に限界だ。

体勢的に無理でなければ、唾でも吐いてるところだ。

「その汚ねー耳をかつぼじって、よく聞いておけ。  
俺は貴様が大嫌いだ。」

そのツツジみてーな頭も、タラコ顔も、その煙草臭え息も、ぶくぶく太った醜い体も大嫌いだ。

そんな奴の側にいるなんて、考えただけで反吐が出るぜ」  
「……。」

「あ？ 聞こえなかったのか？ もう一度いつてやろうか。  
ああ、てめーのナメクジみてーな脳みそじゃ理解できブホっ」

一切手加減無しで殴られた。

俺の髪が乱れ、涙が飛び散る。

いくらなんでも強く殴りすぎだっつーの。

うえ、意識が混沌としてきた、揺れる脳が気持ちが悪い。

「朕を前にして、よく吼えたにやも」

汗で、顔に張り付いていた髪がそつと払われる。

ひきつけを起こしたかのように呼吸が乱れているため、言葉を発するのにも一苦労である。

「・・・ぐそつ、少しは・・・手加減しやがれ・・・よ。この・・・  
チンカス野郎が」

「・・・口の利き方に気をつけろと言ったはずだが？」

「いいじゃんかよそれくらい！！」

涙でボコボコに歪んだ世界の真ん中に位置する、やつの首筋に両手を伸ばす。

俺の手が小さいのか、やつの首が太いのか、両手を使っても首を完全につかむことができない。

それでも構わず、思いっきり力を入れて首を絞めてやる。

ぜんぜん効いてない。

10分これが続けたところで、奴にはなんのダメージももたらさない。  
い。

死にたい。

「わかれよ！！」

俺とお前じゃ、どう頑張っても喧嘩にならねーだろ！

社会的にも！ 腕力でも！ 今だって、ほら、このザマだろーが  
！」

涙声で叫ぶ俺の顔をじつと見つめる皇。

インカラは、首に巻きつけられた手を振り解くこともしない。

気が付けば俺の腰は膝の下をくぐらせた奴の両手でがっちりホルドされていて、そのまま貫かれた。

気力で声を押し殺して耐える。

“以前”よりも比較にならないほど痛い。

たった3度突かれただけで我慢できなくなり、やつの首から手を離し、俺の腰をつかむ腕を剥がそうと懸命に試みる。



快感などまるで無くて、ひたすら痛いだけである。  
知ってるだろうか。

人間は腹部にある程度以上の激痛が走ると、じっとしてなどいられない。

というわけで、うつかり腹筋と括約筋に力を入れた俺は堪え切れなくなり、断末魔の悲鳴をあげた。

軽く意識が飛んでいたらしい。

俺が気を取り戻したときには、ひとりで寝台に寝ていた。

インカラの姿は見えない。

お尻の下のところがいりいなものでぐっちゃりと濡れている。

畜生、いつ失禁したかすら記憶にない。

ただっぴろいベッドの端のほうに移動し、俺は文字通り泣き寝入りした。

翌朝目が覚めて、そのままぼーっとしていたら、ナガシエが現れて、俺の足に悪趣味なものを嵌めやがった。

鉄ばい頑丈な足輪と、鎖で繋がった黒光りする重り。

5kgは超えているだろうそれが両足にである。

「良いというまで、絶対にはずしてはならぬとの、オウルオ皇の命令です」

心配しなくても、こんなもの自力で外せません。

そのまま出て行ってしまおう。

俺はこれからどこへ行けばいいのかすらわからない。

俺は思案した末、以前入れられていた座敷牢のあたりを目指すことにした。

あの特有の痛みと、両足の重りのせいでぎこちなく、ゆっくりとしか歩けない。

途中の階段をそろりと下りていたら、左足の錘がガタガタと階段を落ちていく。

あまりのヤバさに顔面蒼白になる間も無く、左足が釣られて板を踏み外した。

股が裂けるんじゃないかっていう痛みのあと、右足の錘も転がりだして、俺もなすすべなく転落した。

左手を突いたときに、手首に激痛が走った。

・・・最近こんなのばかり。

大音響を聞きつけて、トナミが走ってきた。

「ココ様！ 大丈夫ですか？」

奇跡的に足は何ともない。

「あ、あははは。・・・っボへ」

手をひらひらを振って無事をアピールしようとして、あまりの痛みに変な声が出た。

医者が呼ばれ、左手は添え木をされてぐるぐるに固定される。軽く骨にひびが入っているそう。くすん

新しくあてがわれた部屋は、日当たりもよく快適だった。

本来一族で使うことを想定された間取りも、王族と呼べる人間がインカラひとりしかいないため、部屋も余り気味なのだそうだ。

足首のわっかで皮膚が擦りむけて痛いため、トナミが内側に詰め物をしてくれた。

ついでに、錘が床を傷つけないようにと布でくるんでしまった。

階段を上り下りするときは、手でその結び目を持って、持ち上げて運べ、ということらしい。

もつとも、すごく重くて、この左手ではとても持ち上がらないので、階段はしばらく避けることに決めた。

昼過ぎに部屋にインカラがやってきた。

トナミに髪の手入れをしてもらっていた俺は、そのまま無視を決め込む。

「また怪我しただか。全く落ち着きのないやつにやも」

「うるせえ。てめーがくつつけたこの錘のせいで階段から落ちただけだ」

「自業自得にやも」

「なんでだよ！ どう考えてもてめーのせいだろ。このゲジ眉タンポ頭！」

「この髪型を馬鹿にするにやもか！」

トナミがおろおろとしている。

俺たちの罵りあいには止まらない。

「冗談にしか見えねー。まー、太ったコケシみたいで面白いよ」

「おみゃー、朕が口の聞き方に気をつけると言ったのを忘れたか？」

「はん、聞こえねーな」

インカラは煙草を俺に吹き付けて、偉そうにこう言った。

「まともな口が聞けるようになったら、それを外してやるにやも」

「くそ、そういうことか」

俺を調教でもしてるつもりなのか。  
何様のつもりだ、死んでしまえ。

「ははあ、左様で御座いますにやもか。  
語尾ににやもにやもつければ合格ですかにやむ先輩」

お、

外見相応の声で、にやもにやも言うケモノ娘。  
結構おいしいかもしれない。

「っ！ 問題外にやも」

ぷいと出て行ってしまうインカラ。  
あー、怒ってる怒ってるざまーみる。

へたりとトナミが座り込んだ。

「ああ、心臓が止まるかと思いました」

「トナミも心配性だなー。もつと肩の力を抜けばいいのに」

「とんでもありません！

オウルオ

皇にあんな暴言を吐いて、即刻打ち首にならなかった人を見たの  
はこれが初めてです」

「嘘、マジで？ そんなにポンポン人殺すのかよあのデヴ」

「さっきのはココ様も悪いです！ いいですか、ちょっとそこに座  
ってください」

「いや、もう座ってるんですが」

それから軽く20分くらい、淑女の嗜みその他について説教されま  
した。



## 06 妃殿下の消閑

俺は暇を持て余していた。

この城に来てからそこそこ経つ。

包帯もようやく左手首を残すだけとなり、体調はほぼ元通りになった。

相変わらずでかい重りを引きずって歩いているので、逃げ出すのはとうに諦めた。

そのことを考えると憂鬱になるが、ポリアンナの真似事でもしつつ少しは前向きに生きようと思う。

一昨日、新しく覚えた遊びがある。

“ココを楽しませる”ことだ。

俺が何もしない状態で放置しておく、度重なる人間不信ですっかり引っ込み思案になったココがびくびくとあたりを見回す。

ココが怯えたり興奮したりすると、薄皮一枚隔てた俺もその余波を味わうことになる。

逆に、ココが幸せいっぱいだ、その幸福な感情が俺を包み込む。これがなかなか心地良いのだ。

それに、最初に気が付いたのは、夕食で見慣れぬ果実が出てきたときだ。

柑橘系の何かであることは間違いないのだが、俺の辞書にはない。なんだろうこれは、と思索に没頭していると、体が勝手に動き始めた。

いや、久しぶりにココが体の支配権を行使しているのか。  
器用にひょいひょいと皮を剥いて、ひと房口に含むと、爽やかで甘酸っぱい香りが口に広がった。

「えへー」

頬がだらしなく緩んでいるのを感じるが、俺はそれどころではない。  
な、なんなのだこの癒し系の新感覚は！

ああ、うああ、くふう。

あー、冷静な状態で、きつちり脳内麻薬を味わうとこの多幸福感が得られるのだろうか。

ふと鼻をすするような音が聞こえた気がして横を見ると、感極まったトナミが目頭を抑えていた。

・・・なんです。

さて、あの感覚に嵌った俺は、ココの嗜好を研究することにする。  
食事で新しいものが出てきたときは、内なる自分と対話しつつ、ゆっくりと味わう。

日常生活の中で無意識に目が追ったものを、記憶にとどめて、その頻度等を集計する。

耳や尻尾は、俺が一切操作できない数少ないパーツなので、それらの動きはかなり有力な手がかりとなる。

比較的早い段階で判明したことは、ココはトナミが大好きらしいということだ。

どうやら、名前を頻繁に呼んでくれるのが嬉しいらしく、微かに声



が聞こえただけでピクリと耳が反応するのだ。

まあ良い、俺も彼女は好きだ。

試しに昨日の朝、寝ぼけたふりをしてココの好きにさせていたら、甘えた声でトナミに抱きついてすりすりしているではないか！

俺には絶対真似できない芸当である。

らぶらぶピンク空間はしばらく続き、俺はドラッグを堪能した。

ちなみに、その日一日トナミがえらく上機嫌だったことを付け足しておこう。

今俺の目の前には、その辺からかつぱった小ぶりの壺がひとつ転がっている。

ココが、ぐるぐるするものに興味があるらしいと気がついた俺は、セッティングに余念がない。

お前が今感じている感情は、精神的疾患の一種だ。満たし方は俺が知っている、俺に任せろ。ぐへへ

場所と時刻も綿密に計算してある。

昼下がりの、西日が斜めから差し込んで、床に濃密なコントラストを生み出すこの時刻。

ココが緊張しないように、めっきり人の通らない廊下を選ぶ。

まずは、俺が手本を見せる。

取っ手のないこのつばを両手で挟み込むように持ち、ぐりんと回転させつつ手を離す。

しゃわしゃわと独特の音を出して複雑に回転する独楽。

差し込むディレクションライトが、廊下のテクスチャの上に、独特のシャドウマッピングを刻む。

艶やかな壺の表面が、壁などに光の水面を投射する。

フレームが進むにつれ、軸のブレが指数関数的な拡大を見せ、やがて完全に横倒しになったつばがゆっくりと動きを止める。  
どうだ？

ココは恐る恐るあたりを見回してから、俺の真似をする。

不器用に壺を回そうとするが、初速が遅くて綺麗に回らない。

ムキになって何度も挑戦するが、うまくいかない。

やがて拗ねて体のコントロールを手放すが、俺は敢えて手伝わない。  
っていうか、こんな器用な真似ができる割には、俺が別人格である  
ということは理解できてないのだから対した動物脳である。

我慢競べでココが俺に勝つことはありえない。

やがてココはしょんぼりと練習を再開する。

何回やっても巧くいかないのだが、みしりと近くでした物音に驚いて  
変に力がいったら、うまく回りだしたようだ。

耳も完全に独楽の方を向いているし、尻尾もぱたと動き出した。  
もう一回やったら、こんどは理想的に回り始める。

ふわああああ、キタ。キマシタヨー

苦勞して乗り越えた壁なら、喜びもひとしおなのだろう。

手を叩いて喜んでいるココの中で、俺はつかの間の多幸感に浸る。  
エンドルフィン

ああ、効くう。

しかし、幸せな時間は長くは続かなかった。

縁側状の廊下で調子に乗ってつばをくるくる回していたりしたら、  
いつか庭に落下する。

案の定、つばは甲高い音を立てて庭に破片を撒き散らしてしまった。

あー、浸りすぎて、つい監督を怠った保護者の俺にも責任はありそうだ。

薄皮一枚隔てて俺がたゆたっていた多幸感は霧散し、代わりに失意、悲しみ、罪悪感が襲ってくる。

慰めようにも、このコミュニケーション不全な同居人に声を掛ける術は無い。

うわ、半べそかいてるよこのコ。

見かねて俺が体を動かそうとしたら、トナミが急に現れた。さっきまでどこにいたんだよ・・・

なんか呼吸が荒くて、手にはつばを持っている。

叱られると思ったのか、ココは奥に引っ込んでしまう。

・・・こいつ、都合が悪くなると引っ込む悪知恵がつきやがった。

「ココ様！ つばなんてわたしがいくらでも用意しますから！」

いや、そうは言ってもですね。

最近オチ担当になりつつあるトナミを落ち着かせるのにはちょっと苦労した。

久しぶりにクロウと会った。

ココはこの男が怖くて仕方ないらしく、もっぱら俺が相手をすることになる。

結構いい奴なのにな。

「お、クロウ」

やつほーと手を振ってやる。

「よう、嬢ちゃん。怪我は治ったみたいだな」

「なんとかな。あとはコレだけだ」

と左手のギプスを掲げてみせた。

クロウは首を傾げる。

「そこ、あの時から折ってたか？」

「違う。この間、階段から落ちて折れた」

「なんか、会った別に違う場所を怪我してないか？」

「そう言うな。この体が脆弱すぎるのが悪いんだ」

「他人事みたいな言い方だな」

「まあ、似たようなものかもしれない」

ちらりとどこかを見て、クロウはこう言った。

「さて、俺はこれから、兵隊共をしごきに行かなくちゃならないんだ。ヤロウ

嬢ちゃん、いや、もう嬢ちゃんなんて呼べないな。妃殿下か」

「悪かったな。お察しの通り、もう生娘じゃないよ」

ジト目で睨むと、クロウは困った顔をしてそっぽを向いた。  
ついでに言っと、妃殿下どころか。家畜のような扱いしかヤツからはされていない。

「そんな、生々しい話をされても。その、皮肉を言いたかったわけじゃありませんから」

「まあいい。その訓練とやらに俺も連れてけ」

「本気ですかい。別に皆で遊ぶわけじゃ無いんですが」

「構わん、俺は今暇なの」

「了解しやした。って、その手は何ですかい？」

「見ればわかるだろ？ 俺は今足に鎖がついてるんだ。外を歩くのも大変……って 痛たたたた！！」

「どうしやした？」

「馬鹿、鎖も中ほどでちゃんと持ってくれ。足首がもげるかと思っただぞ」

「ていうか、何故そんなものが足についてるんですあ」

修練場までは、結構な距離があった。

以前逃げ回った建物群よりも、もっと向こうに、ただっ広い土の広場があり、30人程度の兵士が既に待機していた。

「なあクロウ。なんで俺たちこんなに注目集めてるんだ？」

「そりゃあ、今話題の妃殿下が見に来てるんだからな」

「殿下って呼ぶな。虫唾が走る。ココで良い」

「ココ姫様」

「姫も様も要らない。前みたいに普通に話してくれ」

「了解。しばらく俺はあっちに行ってるから、ここで見てて下さい」

苦勞が兵士たちの前に行つて何か言つた。

やがて、兵たちは一心不乱に剣の素振りをはじめる。

暇になった俺は、壁際に大量に立てかけてある訓練用の槍の近くへ向かう。

その番をしていた兵士に話し掛けた。

「なあお前、俺のことしってるか？」

「はっ。妃殿下ナタデココ様にございます！」

げんなりする。

望まぬ役回りと、黒歴史的なネーミングセンスのダブルパンチだ。

まあ、こんな下っ端に文句を言つても仕方がない。

知つてゐることを吐かせてやる。

「まあいい。俺の質問に正直に答えろ」

「了解しました！」

「俺について見聞きしたことを正直に話せ。名前以外でな」

うわー、ガチガチに緊張してるよこいつ。

つていうか、脂汗流してないか？

「どうした？ 何も知らないのか？」

脂汗が増える。

絶対何か知ってるな、こいつ。  
しかも言い難いことを。

「質問を変えようか。俺が聞くことに関して、はいかいいえで答える」

「了解しました!」

うーん、いまひとつひねりが無いな。

「はいの場合は、『イエス! マム』。いいえの場合は『ノー! マム』だ。それ以外は認めん。理解したか?」

「肯定であります!」

「違う!! イエス マム だ。やり直し!!」

「イエス! マム!!」

よし、だんだんノツてきたぞ。

「貴様、先日の捕り物には参加したのか?」

「イエス! マム!!」

「現時点で、あの時、誰を追っていたのかは知っているのか?」

「イエス! マム!!」

「現時点で、貴様は標的の顔を見たことがあるか?」

「イエス! マム!!」

「それは、今日初めて見たのか?」

「・・・ノー! マム!!」

「・・・本殿にいる姿を見たのか?」

「・・・ノー! マム!!」

ま、まさか。

小声で聞いてみた。

「ベナウイに捕まってた時の俺を見たのか？」

かあつと頬が紅潮する。

あの情けない姿を見られていたとしたら、ものすごく恥ずかしい。

「イエス！ママ！！」

「無駄に元気に即答してるんじゃないやねえよ！！」

ボスボスと腹にぱんちしてやる。  
む、意外と腹筋あるな。

「いいか、あのことは綺麗さっぱり忘れる。今すぐにだ！」

「ノー！ママ！！」

「貴様、反抗する気か！？」

「ノー！ママ！！」

最初は緊張していた兵士も、ノリノリになってきた。  
ちよつと楽しいぞこれ。

「貴様、あの時流布した、標的の身体的特徴などの指令情報は覚えて  
いるか？」

例の誇張されたセクハラパラメーター一覧などだ。

「イエス！ママ！！」

「そして、それが今、出鱈目である事を知った。良いな？」

「ノー！ママ！！」

「貴様アア！！」

「ノー！ママ！！」



「おいそこ！！ 訓練の邪魔だ！！ 静かにしろ！！」

大声で怒鳴りあつて遊んでいると、クロウに怒鳴り返された。  
俺たちは顔を見合わせると、小声にる。

「他に、何か噂とかはあるのか？」

「毎日のように、皇と仲良く喧嘩オウルオしているとか」

「仲良くねーよ！」

つい熱くなる。

「おっと、失礼。誰だそんな根も葉もないことを言った奴は」

「いえ、本殿警備の連中はみなそう言ってますが」

「くそう、あいつ等。今度あつたら足元に豆撒いてやる」

「あ、その話も聞いたことありますよ。なんでも食事がまずいと廊下に豆を投げるんだとか」

「なんでそんな事まで知ってるんだよ！！」

今まで、本殿の衛士は何も干渉してこなかった。

俺の認識の中では、すっかり家具や背景の一部となっていたわけだが、それを改めねばなるまい。

奴等の正体は、壁の耳であり障子の目なのだ。

「ちなみに、今言つた程度の内容ならば、そこで訓練してる連中もみんな知ってますよ」

「・・・なんだそれは」

がつくりする。

「心配ありません、ココ様とトナミ様の人気は、我々の間でも急上

昇中ですから！」

「って、ゴシップのネタになってるだけじゃねーか！」

その日以来、俺はクロウに付いてちよくちよく修練場へ遊びに行くようになった。

「なあベナウイ。俺も直属の兵士が欲しいんだけどさ。30人ばかり譲ってくれない？」

「それはできません」

「なんでだよ！　たくさんいるんだからちよつとくらい良いじゃんか」

「駄目です。貴方は皇に反抗的だからです」  
オウルオ

「いくらあのブタだって、暗殺したりしないっての！！」

「どうしてもというのであれば、皇に直接お願いしてください」

「うへえ、あのドSにそんなこと頼めるわけないじゃん。

いまだに足の鎖も取ってくれないっていうのに」

「それでは諦めて下さい」

「くそ、ベナウイのしみつたれ」

「なんと言われようが、駄目なものは駄目です」

「ケチ」

06 妃殿下の消閑（後書き）

2010年	2010年
06月	06月
30日	30日
誤字修正	投稿

## 07 逗留

俺に課された仕事も、決まった日課も特に無い。  
どちらかというと日中は放ったらかしにされている。

朝みつけたタンポポのようなふわふわの花を手に取り、その芳しさを詩的に表現しようとしたらくしゃみが出た。

腹いせに綿毛のようなものをちまちまと羽目板の隙間に植えつけてやる。

いつか壁の花に成長するかもしれないし。

一見、悠々自適な生活なのだがまるで嬉しくない。  
理由は言わずもがな。

数日に一度のペースで、俺は皇の夜伽オウルオに呼び出されている。

1夜目はひたすら痛いだけだった。

2夜目は痛かったが、気を失うほどではなかった。

4夜目にして、奴の執拗な責めの前に、初めてイッた。

今夜は特に呼ばれなかったので、自室にいた。

新月が近いのか、月は出ていない。

この文明レベルの社会では、暗くなってしまうとあまりすることがない。

燃料も植物油も貴重な戦略物資であり、無意味な浪費は自分の首を絞めるだけの行為である。

日没とは一日の終わりなのだ。

全然眠くならないので、ゆったりと長椅子に腰掛けて、ちろちろと燃える灯心を眺めていた。

ここではない何処かで、カラフルな色や造型に惹かれて、アロマテラピーや蠟燭などを買ったりしていたことを思い出す。

原始的な仕組みとはいえ、工業製品として完成の域に達しており、精度も良かったあれらは、風がふかない限り炎はほとんど変化しない。

それに引き換え、これは油を入れた金属の器に、植物繊維を縫った紐が半分浸してあるだけだ。

使い勝手は今ひとつで、煤も多いが、炎を見ても飽きないという長所があった。

ふと我に返ると、暗がりには誰かが立っていた。

「・・・インカラか？」

返事はなかったが、間違いなくそうだろう。

他の人間は、そもそも黙って背後に近づいたりしない。

俺を標的にした殺し屋だったら、とうに俺は死んでいる。

顔を合わせるたびに、彼をあれこれ罵倒する俺だが、毎日そんなことをやっているといい加減語彙も尽きてくる。

こういう静かな夜の四十万を、怒鳴り合いで乱すというのも無粋な話である。

平和目的できた人間を攻撃しない程度には、俺も平静だった。

「どうした。俺に何か話でもあるのか？」

それだけ言って、他に座る所も無いので俺の寝台に座らせる。

棚から、徳利と水差しを用意してすぐ傍の長椅子カウチに戻る。  
二つの杯に、それを注ぐ。

「まあ良い。飲め」

あまり強くないが、風味と喉越しが良いこの酒は、俺も気に入っていた。

奴も黙ってそれを煽った。

「おみやーはあの時、どこに向かおうとしていたのだ」

あの時といえば、俺が脱走を試みたときくらいしか思いつかない。

「目的地なんか無かったよ。

まずはあの大量の追っ手から逃げることに全力を注いで、ただそれだけを考え続けてた」

「ベナウイが褒めていたにやも。

自分でなければ、おそらく取り逃がしていただろうとな」

「残念だが、奴の方が上手だった。その結果が全てだ」

「生まれた村に戻りたいのか？」

「故郷だつて？ そんなものは、この世界のどこにも存在しないさ」

「戦争か何かで滅ぼされたのか？」

「原因は何だろうな。ただ、遙か昔、完全に滅びたことは間違いない」

俺の故郷は山形だ。

デリカシーに欠ける民放などには、田舎の代名詞みたいに馬鹿にされていたが、それでも俺はそこに生きる人々が好きだった。

うたわれるものに接したとき、トウスクールがよく知った地域に広が

っているのを見て、ちょっと嬉しかったのは覚えている。

「家族は無事か？」

「俺にはわからない。ただ、この世界のどこを探しても、誰も見つからないことだけは確かだ」

そもそも、俺の姿をした人間もこの世界になど存在しない。  
いるのは“ココ”の体を間借りしている俺だけだ。

「無事逃げ切ったら、どうするつもりだったのだ」

「さあな。野宿してたかもしれないし、どこかの農村に転がり込んでいたかもしれない。

盗賊に捕まって慰み者にされていたかもしれないし、獣に食い殺されていたかもしれない。

少なくとも、今みたいな生活は有り得ないだろうな」

「まだ逃げ出したいと思っているにやもか？」

インカラは、驚くほど無表情だった。

いつも、性格の悪さが滲み出ている顔を見慣れていたからちょっと驚きだ。

「俺にもわからん。少なくとも・・・」

そう言って、足元の錘をコンコンと蹴る。

「これがある限りは不可能だ」

「それが外れたらどうする」

「どうするんだろうな。その時の俺に訊いてくれ」

そういつて、手元の杯を一気に煽る。

「てめーが、もうちょっと優しくしてくれれば、逃げ出そうとは思わないかもな」

「おみゃーがもつとまともな口を聞けば、少しは可愛げがあるはずにやも」

「馬鹿言え。これを外してくれば、検討してやつても良いぜ」

そういつて、奴の杯にも酒を補充する。

この程度の距離なら、錘を引き摺らなくとも行き来できるのだ。奴は沈黙したまま、それを空ける。

「インカラ。てめーの家族は無事なのか？ この城には誰もいないようだが」

「おみゃーは何も知らないのか？ この国の人間なら誰でも知つてると思うが」

「知らん。ああ、まだ言つてなかったな。・・・俺には、昔の記憶が一切残っていない。」

この城に連れて来られた日があるだろ？

前の日の夜中道端に倒れていたのを、通りがかったあの村の連中に見つかったというわけだ。

荷車の中で目が覚めたのが、最初の記憶だ」

そう告げると、インカラの目が一瞬だけ見開かれた。

「ということは、あの連中は、倒れていたおみゃーを拾って、租税の代わりに売ったということか」

「正解。まさしくその通りだ」

「・・・醜い連中にやも」

俺は苦笑した。



「あんたの口からそんな科白が聞けるとはね。」

それで、……今日は誰かの命日なのか？」

そう尋ねると、インカラは少し驚いたように頷いた。  
女の勘を舐めるな。

「朕の母上は、13年前のこの夜、涼もうとして外に出たところで、裏切り者の衛士に暗殺されたにやも」

この独裁者の口から飛び出た、目上の人間に対する呼称は、すごく不似合いだった。

「……そうか」

「犯人が見つからなかったので、父王とササンテが怒り狂ってここを警備していた衛士全員に自害を命じたら、

反抗的な豪族の息の掛かった奴らが炙り出されてきたにやも」

「不毛で血なまぐさい話だな。……で、そいつらはどうした？」

「反抗勢力は、ササンテが残らず粛清したにやも」

「へえ……」

あのヒゲダルマ、本当に手柄を残していたのか。

つて、あんたはそのとき何やってたんだとは聞かないことにする。

程よくアルコールが回ったせいか、急に睡魔が襲ってきた。  
俺は小さくあくびをして、インカラが座っているベッドに潜り込んだ。

「おい、てめーも寝るなら、ここで寝ていても良いぞ」

いつ何時でも望むがままに俺を好きにできる暴君を、いまさら警戒したところで何になるというのだ。

「おみやー、朕に指図するにやもか？」

「けっ、こんな日に一緒に酒を飲む相手すらいなかったんだろ？」

いい歳こいて寂しい奴だな」

「馬鹿にするな。ただ、かつて母上が使っていたこの部屋を見にきただけにやも」

「はいはい」

翌朝。

目が覚めて、状況を把握してげんなりした。

腹いせに、小山みたいな腹をわざと踏んづけて乗り越え、床に降り立つ。

うわ、まだ寝てる。

熟睡しすぎだっつーの。

いつか寝首を掻いてやる。

まあ良い、いまは他にやるべきことがある。

さっさと部屋を出ようと一歩ふみ出そうとして、何も無いところで

何故か転けて、うつかり左手を突いてしまった。

「ギヤアアアア！」

しばらく床に転がったまま悶絶する。

そのままの体勢で後ろを振りかえると、むくりと起きた男の腹に錘が引っかかっている、足の鎖が伸びきった状態になっているのが見えた。

「朝っぱらから騒々しい奴にやも」

「五月蠅えよ！ 貴様の太鼓腹が邪魔なんだよ！」

「自業自得にやも」

「なんでだよ！ てめーがくっつけたこの、って今は無駄話をして  
いる暇は無え。」

「さつさとそれ放してくれ」

「そんなに急<sup>せ</sup>いて何処へ行くのだ？」

「貴様がそれを知る必要は無い。」

「っていうか、漏れそうな時に絡んでくる人間ほどウザいものはね  
ーよ」

「さつさと部屋を出ようと立ちあが「ギヤア！」」

「右手を使って立ち上がるうとしたときに体勢が崩されればどうなる  
か。」

「またもや左手を突いてしまい悶絶する。」

「怨念を精一杯込めて後ろを睨み付ける。」

「ニヤニヤと下卑た笑みがたまらなくムカつく。」

「事情は良くわかったにやも」

「黙れハゲ」

「素直に今までの無礼を詫びて朕に忠誠を誓えば、この錘を放して、

いや外してやるにやも」

「貴様は鬼かアアッ！！」

このドSのせいで、俺は何度か痛い目にあっている。

希望的憶測は危険だ。

膀胱が限界に達した俺が、床の上をのた打ち回った挙句逢えなく討ち死にするのを、

煙草を吸いながら特等席で鑑賞しちゃうような変態<sup>ロリコン</sup>なのだ。

クソったれ。

助けを求めてあたりを見回すと、何故かニコニコとしたトナミが目に入った。

「おはようございます。聖上。ココ様。」

「おはようトナミ。俺の窮状は理解できたな」

「はい。それはもう」

「話が早い。さっさと助けてくれ」

「かしこまりました」

と、俺たちを見て、その場でなにやら思案するトナミ。

やがて、何かを思いついたように、ポンと手を打った。

「少々お待ちください。急いで尿瓶をお持ちしますね」

「違う、それ違う！！　って待てこのおバカー」

流石の俺でも、この仕打ちはかなり堪えた。  
涙目で裏切り者を睨み付ける。

「トナミてめえ、覚えてろよ」

「お任せください、うなじまで真っ赤にして抵抗するココ様もなかなか・・・」

「それは忘れろ！」

「ううう、もうお嫁にいけない」

「自業自得にやも」

なんだと。

言うに事欠いてそれか！？

怒りのあまりプルプルと震える。

「よりによって、貴様がその科白を吐くことだけは、何があっても納得できネエエエ！！！」

「大丈夫ですよココ様。聖上が貰ってくれますから」

「お前ら一辺死んで来いイイイ！！！」

その日の夕刻、拳動が不審だった修練場の兵士を問いただしたら、既に今朝の事件が歪曲して伝わっていた。

縦型組織の代名詞であるケナシコウルペ軍において、作戦時の指揮系統とは異なる、ネットワーク型の情報伝達網が出来上がりつつあ

るらしい。

指揮系統が潰されても動きつづける強靱さと、機密漏洩ルートが特定できない匿名性が脅威である。

情報収集も兼ねて、本殿警備の衛士を捕まえて詰問したら「ノー！マム！」とか答えやがった。

クソ、修練場発の情報もダダ漏れらしい。

俺にプライバシーなど無いというのか。

全く持って許しがたい。

ゴシッパーパーな人々へのいらだちは募る。

いい加減、俺の怒りも有頂天に達するというものだ。

## 08 ハンドメイド・オーバーツ

俺を縛る文字通りの足枷のせいで、気の赴くまま、とまではいいもの、

それさえ度外視すれば大概のところへは行くことが許されたみたいだ。

ナガシエがそういつていたのだから間違いない。

久しぶりに本殿の周囲を歩き回ってみる。

無意識のうちに、ここを“トウスクル”城ではなく“ケナシコウルペ”城と認識していた自分に気が付く。

もう、俺はここの住人になってしまっていたのだ。

さて、俺の持論だが、環境が変わったことを心から受け入れたと感じるのは、

夢に新しい土地、新しく出会った人々が登場するようになってから、だと思う。

毎日の用に顔を合わせている人々であれば、当然短期間で夢に登場するようになる。

学校や仕事の同僚クラスであれば、人によって個人差はあるものの2ヶ月から半年くらいで、その人々が登場する夢を見たりするらしい。

会うのが、週に二晩、とかであれば、一年以上経っても夢に現れずらしいことがままあるようだ。

ちなみに、ゲームの世界に入り込む夢を見ちゃうような人間は、廃人判定して構わないと思います。

閑話休題。

俺は、未だに遠いどこかで生きていた頃の夢しか見ない。

まだ数週しかここで生きていないからなのかは、もっと時間が経たないと判断できなかった。

寝ている間だけは、別の世界にいける。

とうに磨耗して、もといスレて、自分でも存在を信じていなかった  
乙女回路がかすかにうずいた。

しばし歩きまわってだんだん飽きてくると、俺に振り回されまくっている同居人のメンタルケアの必要性を思い出した。

ココはその気になれば、体を動かす支配権を強引に奪っていけるのに、なぜか俺の好きにさせてくれている。

彼女は、俺と自分が別人格であるとは未だに認識している訳ではないらしく、過剰にストレスを貯めているというわけでもない。

彼女からすれば、俺はちょっとした“おすましモード”程度の認識だ。

それが長期的に見て、良いことなのか悪いことなのかの判断もつかない。

当初、俺自身が前向きに生きようとはじめた“幸せ探し”。

今ではもっぱらココの多幸症作戦（略してKTP）となりつつある。



っていうか、俺なんかと違って可愛いココは、いくら甘やかしても足りることはない。

姉馬鹿というそしりは、喜んで受け止めようではないか。

そう、手段も場所も選ばず、チャンスは逃さない！

地面に降りてなにかをついばんでいた数羽の鳩のような鳥を見つけ、ココを解放する。

手足はもとより、眼球まで俺の制御から脱したために、独特の浮遊感が俺を包む。

今思えば、あの日、荷車の上で感じていた感覚はこれなのかもしれない。

ココの集中力が高まり、耳がぴんと立てられる。捕まえる気だ。

両手を前に構えて、抜き足差し足で近づく。

鳥の首が、こっこつと前後に揺れるたび、尻尾もつられてひょこひょこと動き出す。

うほっ、こいつ可愛すぎる。

薄皮一枚隔てた俺が、一瞬の高揚感に包まれた瞬間、ココは一気にルパンダイヴした！

べちゃ「ふぎゅっ」

あー。

両足の鎖の先の錘の存在を忘れるとそうなる。

しかも、ココは手を突いて体を庇うのがトラウマになってしまったらしく、倒れ方も実に下手くそである。

「ふあああ・・・」

失望のあまり半べそをかく俺たちをあざ笑うように、鳥は飛んでいった。

物悲しいヒット曲が脳内で再生されているあたり、俺は割と余裕っぽかったが。

不気味な音が聞こえてきて、ココが怯え、耳がそちらを向いた。やや遅れて、視界もそれに追従するのを観測する。

本殿の入り口を警備していた二人の兵が、妙な音声を発しつつ、蹲って腹を押さえていた。

かねてより見てみたかった“バカ専用トイレ”を見つけようと、後宮より未体験フロアへ突入する。

ギプスが取れて、ようやく使えるようになった左手があれば、錘を持ち上げて少々の段差や階段なら突破できる。

ある地点から、兵士も含め誰の姿も見かけなくなった。  
腐っても皇の居城。<sup>オウルオ</sup>

本当に限られた人間しか、ここへ立ち入ることは許されていない。何重もの堀や、足元を積石で固めた高い壁を駆使しているとはいっ

ても、セキュリティや建物の気密性には期待できないここでは、最大の抑止力となるのは、極めて厳しい罰則である。

暇つぶしの雑談ネタに無駄に命を掛けるほど、奴等も愚かではないだろう。

ここのなら、俺のプライバシーを身包み剥がす非合法ネットワークの手も及ばない。

奴等に対する切り札をひとつ手に入れた事を理解し、俺はにやりと笑った。

ちなみに、目的のブツは建物の外で発見した。

期待を裏切らない、すばらしく無駄かつ華美な代物で、馬鹿馬鹿しすぎて逆にクオリティ高いです。

使用感は、・・・えっと、まあまあかな。

謁見の間にも顔を出すことがある。

とは言っても“ステージの袖”のような所で、警備兵と小声でだべりつつ、何とはなしに中の様子を伺っているだけではあるのだが。

ケナシコウルペは法治国家と呼ぶにはあまりにもお粗末であり、封建制 及び 専制君主制というのが実情である。

議会も存在しない。

明文化された条文がほとんど無いため、司法も行政も、上に立つ人間の裁量で随時処理されていく。

トーナメントのような社会の階層に、それぞれ長が存在する。

親子であれば親、家族であれば家長、氏族であれば頭領あるいは長老、村ならば村長<sup>むらおな</sup>、と言った具合に・・・である。

慣習的にそれらの人間の意見は尊重されており、彼らの裁定には従うべきである、というルールが根底に流れている。

ヤマユラを例に取れば、個人間や家族のレベルで解決できなかった問題は、村長であるトウスクルの元へ提出される。

トウスクルがこれは自分の手に余る、と判断した場合は、その地域の領主であるササンの元へ出向く。

ササンの匙を投げた場合、国家の最高権力者であるインカラに決定が仰がれる。という仕組みである。

血の繋がりが重要な意味を持ち、年長者が当然のように敬われる、ベルエポックな社会ではこれらの仕組みもうまく機能する。

いや、した。

しかし、一度腐敗するとそう簡単には元に戻らない。

単純な確率論に基づき、それらの統治が長い期間続けば、社会に内包する腐敗も確実に増加傾向を示すのだ。

時折、世直しに燃える善人が表れ、一步改善してやがて二歩腐敗する。

長く続く王朝ほど、鋼鉄の軍事的基盤と優れた社会システムを実装していたことを鑑みれば、歴史とは皮肉である。

上記に述べた要素により、一国の皇のもとに持ち込まれる案件は、オウルトーナメントをタライ回しに勝ち抜いてきたネタとなる。

つまり、一般的に重要であり、深刻であり、緊急度も高く、スケールが大きい問題となる。

例えば、村同士の水源を巡る争いの裁定、台風シーズンを前にして堤を強化整備したいという要望、  
砦や関所の補修工事の要請、とある集落で流行り病が発生したという報告。

皇は本来多忙なのだ。

毎日、決められた時刻に謁見の間に座り、王としての執務をこなしている。

その部屋にいらなくても、木を薄く削った書簡によって持ち込まれる案件も処理しなくてはならない。  
内政問題に加え、軍事、外交、宗教、教育、その他いかなる分野でも的確に処理をしなくてはならない。

意外なことに、インカラは、まあ頑張ってはいるようだ。

例え、弱者の理などまるで理解できず、民の立場にたって物を考えたりなどしなくても。

たまに癪癪を起こして、話の途中だろうが相手を追い出したり、ムカつくと嫌がらせそのものの指示を出したりしても。

許可が「好きにするにやも」、拒否が「そんな金は無いにやも」といった程度のお粗末な指示であっても。

周囲のものに聞けば良いのに、見栄を張って近視眼的な不味い決定を得意げに下していたとしても。

はなから公務を全て放棄してしまっているよりはずっとマシだった。

率直に言って、ケナシコウルペが、小国だからこそかろうじて国が運営できているような気がする。

領土と人口がそれぞれ10倍にでもなったら、このやり方ではあつという間に破綻してしまうのが目に見えるようだ。

インカラも悪いが、周囲の人間もダメだ。

親族は近くに誰もいないし、ナガシエは公務の中身には一切口を出さないし、ベナウイも基本的にはイエスマンである。

ゲンジマルのような、口やかましい歳を取った相談役がいれば良かったのに。

その他の人間も、短気な皇を恐れて、肯定の意見しか述べない。

そう、王に面と向かって何度となく暴言を吐いて、まだ首が繋がったまま宮中に居る人間など俺しかない。

しかし俺だって、謁見の間に乱入して、いつもの調子で振舞うのは控えていた。

外部から来た人間の前で、皇のメンツを丸つぶれになどさせたら、俺もマジで処刑されかねない。

人々が寝静まった夜、為すすべなくいいように抱かれつつも、奴をブタとかハゲとか罵るのはリスクが桁違いだ。

小さな地雷なら承知で踏みつけてやるが、核地雷かもしれないものには二の足を踏む。

そういうことだ。

この国が末期的な状況にあり、そう遠くない未来、ハクオ口を担ぎ上げた民衆が叛乱を起こすことを・・・俺は良く知っていた。なのに、ただ黙って見ているだけの俺は、間接的にインカラを見捨てているも同然だった。

裏切り者と、道義的責任を追及するささやかな心の声など“だってこいつ言うこと聞かないし仕方ないじゃん”で封じ込めながら。

その日、謁見の間はいつもより人数が多かった。ベナウイをはじめよく見知った顔が何人もいる。

「おい、今日は何があるんだ？」

とすっかり馴染みの警備兵に訊いてみるも、彼らも何も知らない様子だ。

ふむ。

きつと、重要な客が来るのだろう。

他国の使者かもしれない。

中の連中に聞けば疑問はすぐに解決するはずだが、うっかり外来客と鉢合わせるのもいやなのでここで見ていることにした。

そこを訪れたのは、どことなく見覚えのある男だった。

「御呼びに応じ参上いたしました。毎度ご贔屓いただき、誠に有難うございます。ハイ」

ち、チキナロさんではありませんか

っていうか、語尾のハイが判断基準という俺もどうかと思う。

品物を並べて商談を始める面々。

うずうず。

俺の好奇心が刺激される。

f・いや婦女子たるもの、ショッピング“も”好きで何が悪い。うずうず。

遺伝子レベルでそうなのであり、好きなものは好きなのだから仕方がない。

いろいろと。

話を聞いているうちに、この国とチキナロの関係がある程度わかってくる。

単に、高価な嗜好品等をととき売りにくるだけだと思っていたのだが、もっと取引量は多そうだ。

国内で入手の難しい食材を筆頭に、皇城の中で消費されるその他物資も、定期的に大量購入している模様だ。

なるほど、たいした優良顧客である。おごくりさま

国家中枢の補給を、プロプライエタリな民間企業に依存するというリスクマネジメントのお粗末さとか野暮なことは放っておこう。

ほどなくして我慢にも飽きた俺は、賑わう市場へ踏み込んだ。



一番良いポジションを当然のように陣取っている邪魔者インカラの脇から、ひょいっと覗き込む。

奴は振り返りもせずこんなことを言った。

「やはり来たにやもか。いつものように外で見ているだけでは我慢できなんだか。現金な奴にやも」

「うる……」さい黙れ。

いや待て落ち着け俺。

片手で上品に口元を隠し、もう片方の手でひらひらと突っ込みの意を示す。

「あら、いやですわ聖上。もう」

いきなり、トナミとインカラのふたりが、がばつと振り向いた。

「誰？つて、……コ、ココ様！？」

信じられないものを聞いたかのような驚愕の目が俺に向けられる。なんて失礼な奴等だ。

「トナミ、はしたないですよ。急にどうしたのですか？」

余裕の態度を崩さずにやんわりとたしなめてやる。

「おみゃー、何か変なものでも拾って食ったただか？」

こっちの耳をぐいと引っ張って、しきりに首をかしげる皇。オウルオ  
放せバカ。

せっかくこっちが協力してやってるのに！

「オホホ、またまたお戯れを。ほら、そんなに腕を上げると、お召しものがしわになりますよ」

トナミの目を盗んで、こっそり練習してただけあって立ち居振舞いはちよつとしたレベルだと自負している。

現代人は、ハリウッドで計算されつくされた、洗練された立ち居振舞いを何度も目にするができる。

しっかりと腹から芯の通った声を出しつつも、きつく硬くなりすぎぬよう柔らかかで可憐な声を意識する。

軽く二桁は脳内にインプットされている数々のキャラクターも参照し、口は、おしとやかで気品のある言葉を紡ぎ出す。

なにこの無駄な特技。

こうかはばつぐんだ！

そんな調子で話してたら、トナミがだぁーっと目の幅涙を流しだした。

「やればできるじゃないですかココ様。わたし、こんなに感激したの久しぶりです」

「いつもこれくらい殊勝に振舞えばいいにゃも」

「妾<sup>わらわ</sup>はいつもどおりですよ。ね？ 聖上」

「・・・」

なんだてめえその目は。

ふと気が付けば、その場にいる全員がこちらを凝視していた。チキナ口以外、目や表情がなんて失礼なんだ。

先手を打って、こちらからチキナロに仕掛ける。

「そなたがチキナロですね。その良い仕事ぶりは、妾の耳にも届いていますよ」

「は、勿体無いお言葉にございます、ハイ」

さりげなく、チキナロの瞳を検分しつつ、お姫様と臣下ごっこは継続する。

こいつの情報収集力を測ろうと、俺の存在を予め知っていたかを探り出そうとしているのだ。

チキナロは、そのネズミのような印象とは裏腹に、けっこう大柄な男だった。

よく見れば引き締まった肉体に、抑制の効いた知性を感じさせる隙のない振る舞い。

ガードは極めて固く、そう簡単に尻尾は掴めそうもなかった。

「妾は、そうですね・・・ココと申します。よしなに」

「お初にお目にかかり光栄です。しがな不行商のチキナロめでございます。」

インカラ皇はじめ、皆様には昔から大変お世話になっておりますです、ハイ」

「ふふ、そうですね。この良き縁が、<sup>えにし</sup>永く続くとよいですね」

実に和やかに話が進んでいる。

はずなのに、周囲が目を丸くして押し黙っているのどつにも落ち

着かない。

だから、俺に失礼だつちゅーに手前ら。

俺か？俺が悪いのか？

「チキナ口。品物を少し見せていただきますね」

「ハイ。心行くまでご検分くださいまし」

いくつかの品物を手にとってみる。

俺の生きていた時代からすれば、どうしようもなく原始的なアイテムだが、

現代では趣味人しか使わぬような、マニファクチュア家内制手工業の選りすぐりの逸品がそこにあった。

中華街のオリエンタル系雑貨屋にあるようなものと比較しても、なにひとつ劣りなどしていない。

何でも鑑定団のような目利きではない俺でも、それらの良さがすぐにわかるほどなのである。

流石はチキナ口。

商人としての矜持にかけて、皇のもとに半端なモノは持ちこまない。尻尾の反応を見るに、ココも大喜びだ。

夢中になって見てみると、チキナ口とインカラが隣でこんな話をしていた。

「しかし、ココ様……ですか。気品があり、しかしとても愛らしい」

いいぞチキナロ、もつと言え。

「そうではないにやもよ。あやつの見てくれに騙されてはいけなにやも」

なんだとピザ。

「新しい室の方ですか？ 閣下もお目が高い」

ちよつと待てい。

この豚の前で俺はそれを認めなどしない。  
これは譲れない一線である。

「オホホホホ。チキナロ、そなたはひとつ勘違いをしていますよ。  
妾は、そうですね・・・新しく着任した料理長です」

ウェツヘツヘ。偽装は完璧だ。

「左様でございますか、ハイ」

「出鱈目もいいところにやも」

「まあ、わたしも、是非ココさまの御作りになられた手料理を食べ  
てみたいです」

「そもそも、おみゃーは料理などできるのか？」

クソ、てめーら余計なこと喋るんじゃない。

チキナ口は、いそいそといくつかの品物を持ってきた。

「それは失礼いたしました。これなど、自慢の一品ですが出来栄え如何でしょう」

「これは何でしょう。熊用の耳搔きでしょうか」

「ココ様ココ様。それは、カシュ スイエの実の種を取る有名な道具です」

「まあトナミ。ちょっとした冗談ですよ」

危ねえ、いきなりボロが出るところだった。

「これは、鼠捕りの一種ですね」

「ココ様ココ様。それは、モロロウ用のおろし金ですよ」

「トナミ、ただの冗談です」

落ち着け俺。

これまでの経緯をちゃんと分析しろ。

会話の流れからして、これらは全て調理器具に決まっているではないか。

目をかつと見開いて、最後のアイテムを走査する。

創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された材質を特定し、製作に及ぶ技術を模倣し、

発案に至る経験に共感し、蓄積された伝統を幻視する。

「これは、魚の硬い目玉を掘り出すためのものですね」

「ココ様ココ様。それは、深い調理鍋から効率よく麵を取り出すためのお箸です。」

ほら、こう2本組み合わせ使っんですよ」

「オホホホ」

失礼なコメントもできないチキナロが、困った表情でスマイルを浮かべている。

「とんだ馬鹿にやも」

いい加減頭にきた俺は、失礼なコメントもし放題の男の前をさりげなく通り抜ける。

鈍い音を立てて、インカラの足の小指を、俺の足首と鎖で繋がった錘がしこたま挟み、奴は豚のような鳴き声を上げた。

わはは、足の小指は誰でも弱点であると考えて間違いないだろう。

グオオオオ

「あら、聖上。急にお声を出されてどうなさったんですか？」

「貴様、もう許さんにやも」

俺を捕らえようとする腕をかいぐり、奴の周りをぐるぐると回る。短い鎖とふたつの錘が奴の足に絡みつき、自由を奪う。

あとは、正面から奴の太鼓腹を押せば、奴は無様に尻餅を突くだろう。

そして、しれっと完璧なお姫様モードで奴を気遣ってやるのだ。

よし、今だ！

ここぞとばかりに奴の腹を押すが、ちよつとぐらっただけで皇は自らの威厳を守りきった。

怒りで目が据わっている。

がしつと、両手で二の腕を完璧に捉えられる。

あ、ちよつとピンチかも。

「よくもやってくれたにやも」

「聖上、殿中でござる落ち着いてあ痛たた」

そのまま持ち上げられそうになるが、足元で絡み合った鎖がそれを許さない。

「痛い痛い無理に引つ張るな阿呆肩が抜けるわ馬鹿タレこのクソデブ！」

取っ組み合いというには腕力差がありすぎる揉みあいの末、インカラは鎖の中ほどを掴んで、俺を逆さ釣りにした。

「ギヤアアアアアアア！！！！ 降ろせ！ 降ろして！ それマジで痛い洒落になんねー！！！」

全体重をささえる両足首に、金属のふたつの輪っかが容赦なく食い込む。

今日の服は、たまたまタイトなロングスカート風のつくりをしていたおかげで、はしたない逆てるてる坊主にならずに済んだ。

じたばたともかく俺を尻目に、トナミとチキナロがのんびり談笑している。

「トナミ様、助けなくてよろしいのですか？」

「大丈夫ですよ。いつものように遊んでいるだけですから」

「それはそれは、仲睦まじいことで、ハイ」

「そうなんですよ。見ての通りです」

「てめーら見てないで助けろっ！！」

「痛い！！ 超痛い！！、足首がもげる！！ 死ねタコ助、4頭身もっさりアフロ！」



「口のきき方を改め、朕の前に跪いて許しを請うなら降ろしてやるにやも」

「誰がするかバーカバーカ。てめーの臭い足に顔なんて近づけ・・・ギャアアアアア、揺らすなアホオオオー!!」

もがけばもがくほど、自分が痛いだけだと気が付いた時点で数十秒ロスしていた。

怒りと痛みで、どんどん頭に血が上っていく。

逆さ釣りにされているため、重力がそれに拍車をかける。

「ああああああ降ろせー！ 死むうーー!!」

叫び倒しているうちに、鼻腔の奥に、ツンと染みる液体が溜まっていく。

鼻で息をすると、それに“溺死”しそうなので口で呼吸しつつ

「ヤバイ。洒落になんねえ」

この肉体は、なぜこんなにも貧弱なのか。

俺の動きが止まり、声が弱弱しくなってきたところを見計らって、サディストが攻勢に出る。

「まだ諦めぬのか。しぶといやつにやも」

ぱいつと片手の鎖が離される。

痛めつけられた右足首ひとつに、今までの倍＋錘ひとつ分の過重が襲い掛かる。

堪えきれず俺は絶叫した。

目はしっかりと開いているはずなのに、世界が暗くなっていく。

闇夜のように暗くなる世界は、なぜかギラギラと眩しく目を焼いた。息の続く限り叫んだ後がむしゃらに息を吸ったら、鼻血と涙がまざった液体が気管支に入り、俺は激しく咳き込んだ。

トランプタワーのような防御力に蚊トンボなHPしか持ち合わせぬ我が身が恨めしい。

そんな俺を繊細なガラス細工のように扱うどころか、嬉々として割り砕きにかかるこのDSはもっと恨めしい。

血の混じった咳が、騒動を引き起こした。

「聖上！！それ以上やるとココ様が死んじゃいます！！」

まわりが急に騒がしくなり、ようやく解放された俺はふっと気を失った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2295m/>

---

泥舟

2010年10月8日13時43分発行